

平成30年(西暦2018年)2月

瞑想録(その24)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 12. 28

1、古代人の心

私は長足に進んだ現代文明を、「元に戻せ」と言う気はありません。無理に原始共同社会に戻そうとした失敗の例に、40年前のカンボジア人の内戦と大虐殺があります。

ただ文明が一方的に進歩している感があります。そして文明それ自体は便利なものの無機質であるために、そんな今こそ「心のバランス」として文明以前の時代に郷愁と回帰の必要性を感じます。本日はそんな頃の心を思い出させてくれる本を、2冊紹介します。

そもそも「本や記録で残す」と言う習慣と道具が本来的に文明の産物であるために、こう言った古代人の心については「構造的に残らない」と言う矛盾した仕組みがあります。ですからある意味で、「無理を何とか表出させた」これらの本の記述は貴重です。

瞑想録(その24)

(1)、「縄文酋長オピポー」浅川利一著

縄文時代人が遺跡を除いて、自ら自分たちの住環境や習俗や感情を書き残せるわけがありません。この本は玉川大学の考古学の先生であった著者が、学術とは別に自らが知り得た縄文時代の生活を書き残したものです。

著者が縄文の習俗、特に現在の銚子市に遺跡を残す余山の酋長のオピポーについて知り得たのは、きっかけとしては土器の発掘等がありました。しかし直接にはオピポー酋長が夢に現れて語った、あるいは修験者の協力を得て霊と語った素材に、現代考古学の知見を取り混ぜた著書です。

オピポーは今から約3千年前の縄文時代の余山部落の酋長でした。父の酋長の地位を継いだもので、当時は30代半ばの若い酋長でした。オピポーは勇者でありしかも土器づくりの才能があり、部落の一切の祭祀を司っていました。酒(ホリン)好きでもありました。

余山部落の総員は数十名で、当時としては標準的です。住居は家族ごとの竪穴式住居で、食物は狩猟と漁労の両方で得ていました。強い物に与かるための刺青等も、普通になされていました。土器は自分たちで焼き、大収穫があるとまず部落の守り神に感謝の祭りを捧げた後に、無礼講となるのが常でした。

獲物は必要に応じて分配される、原始共産制の社会構造でした。長老が祈祷師の役割をしていました。周囲の部落とは適宜交易をしたりあるいは女を略奪したりと、交攻両方が混じっていました。互いに大和古語としての言葉は通じていたようです。

まあそんな中にも、愛憎とか裏切りとかはありました。部落の力持ちの男が酋長の正妻に横恋慕します。隣のより大きな諸持部落と通じて、ある日反乱を起こします。その結果オピポーは善戦空しく家は焼かれ土器は割られ、彼自身も倒されてしまったと言うのが、彼の語る自伝でした。

オピポーは死んだけれど、も彼が残した土器のいくつかは3千年の時を経て発掘され、今は博物館に陳列されています。学者が学問でないとは言いながらも、こういう本を公にすることは異例です。ここに全人教育を推進した玉川学園の創立者である小原国芳先生の、面目躍如足るところがあります。

(2)、「ホクレア 星が教えてくれる道」内野加奈子著

瞑想録(その24)

現代でも古代の文化をかなり残しているエリアに、南洋諸島があります。ホクレア号は忘れられつつあった古来の文化や技術を後世に継承する目的で、ハワイで原住民によって建造された大型のカヌーです。

主として風力で補助的にはオールによる人力で運行する双胴のカヌーです。南洋諸島各地はもとより大洋までも航海し、10年前には太平洋を渡って日本にも来航しました。著者の女性はその時のクルーの一人で、今もハワイ在住の写真家です。

航海に当たっては、GPSはもとより羅針盤等の文明の機器を一切使いませんでした。古代人が行ったように星座の運航を主体として、その他潮の流れや風の向きや海鳥の行動など自然を体全体で感じ取る航法で、無事に世界の海を渡りました。そして古代の人々がどうやって南洋諸島に進出したのかと言う素朴な疑問に、実証の解を与えました。

星の運航と言っても地球は自転しているうえに公転しているので、いわば2本の軸の周りを回転していてその動きは決して単純ではありません。ナビゲーターはこれを、毎晩星を眺めることによって体得します。しかも曇りや雨の日もあり、毎晩星が出るわけではないのです。

現在はポリネシア連邦に属するヤップ島の古代技術を継承してきた伝説の人に、ガアヤン酋長が居ます。彼によるとカヌーは、「木を切り倒す前からその中に眠っていて、人は単にそのあるがままに切り出すだけ」だそうです。ガアヤン酋長の話は大内青琥著の「ヤップ島の物語」に、詳しく書かれています。

ホクレア号は古代カヌーにしては大型の約10人乗りで、3交代でナビゲーションと運行を昼夜行います。帆は①植物の葉の筋を②編んだ糸を③織った麻のような布です。これを風の向きに応じて向きを変え、強さに応じて広げたり畳んだりするその判断も、海を見ながら毎日瞑想することによってしか習得できません。

食料は干した魚やヤシの実などで、さらには真水も積み込んで航行します。内野さんの本は具体的な航行技術については詳しくありません。そもそも全身体得の方法なので、言葉にもできない暗黙知なのでしょう。でも航海の大変さや苦労のしどころ、そして無事に目的地が見えた時の喜び等については詳しく書かれています。

加えてユーチューブにも何本か動画があって、これらも見の価値があります。併せてカヌーを送り出すときの神々への祈りや、無事についたことを祝うお祝いとお迎え

瞑想録(その24)

の踊り、さらには勇者をたたえる歌等の儀式も、いかにも古代からの伝統を継いでいて、大変心が洗われます。

2、夢と解釈(その18)

＜夢1＞午前中の仕事が午後1時にやっと終わって、急いで社員食堂に駆け込んだ。すると「本日はこの食堂の創立記念日で特別メニューです、そしてあなたはその最後のお客様です」と言われる。見るとメニューの主食がケーキセットでご飯は赤飯、味噌汁にはウサギをかたどった「ふ」まで浮いている。そして代金は「お気持ちで良いです」と言われた。変な組み合わせだとは思ったが、食べてみると結構うまかった。

＜解説1＞はっきり言って分かりません。ケーキがそこまで好きなわけでもないですし。ただ嬉しい夢でしたね。

＜夢2＞今年も転勤のシーズンがやってきた。私は「辞令が出る」と言う前評判だったがやっぱり辞令が出て、「アサヒ化工第6グループ出向を命ずる」だった。まるで分野違いの上に工員で、何の肩書もない平社員だ。しかもその工場は鉄道もない山奥にあって、周りに商店の一つもないと言う。上司に嫌われているのは分かっていたが、ついに「退職届を出せ」と言うことか。その工場を詳しく調べようとしたが、手が震えてパソコンの操作ができない。

＜解説2＞私は確かに今の職場でも、全然役に立っていません。

＜夢3＞家族で連れ立って、湖畔にある友人の別荘を尋ねた。その友人とは、ヘブライ語を通じた仲間である。友人に勧められて湖に行ったところ、娘が足を滑らせて湖に落ちてしまった。慌てて救い出したが、浅瀬で大丈夫だった。見回すとコイやフナが泳いでいる。その何匹かを手づかみにして、獲物として持ち帰った。

＜解説3＞湖とかが出る夢の時は、たいていトイレを我慢していたりします。

＜夢4＞出張で田舎の工場に行った。すると大雨が降りだして付近を流れていた川が増水し、しかも地下水になって伏流していると言う。緊急避難指示が出て山の脇を逃げたが、山肌が伏流の圧力で崩れようとしている。もう覚悟を決めて無我の境地で逃げたら、しばらくして安全地帯に出た。

＜解説4＞川の夢も、やはりトイレの我慢でしょう。

＜夢5＞私はなぜか若手社員だ。同僚が、「こいつは昔に同級生の女の子にコーヒーを淹れてもらって、本当は皆に淹れたのに自分にだけ淹れてくれたと勘違いして感動

瞑想録(その24)

したことがあるのだぜ」と、ばらした。すると同じ課の女子社員たちが興味を示して、「きゃあ可愛い、詳しく聞かせて」などとはやし立てる。私は困ってしまった。

＜解釈5＞こういう良い思い出が本当にあったのか、思い出せません。

＜夢6＞私は会社のシステム開発部員だ。電磁弁やメカトロポンプの動作制御系の、シミュレーションプログラムを使っている。用いている言語は、最近それ用に開発されたものだ。本体をプログラムして動作を可視化し、ビッグデータ伝送のポートを組み込んだ上で作動試験をしてみた。すると一発で正常作動した。私は思わず万歳を叫んだ。

＜解釈6＞ここ2、3日、パソコンの動作が変に鈍いので、気になっていたのですかね。まあ会社で、似たような業務をしたことはありますが。

＜夢7＞私はどこかの学校のグラウンドの、すぐ外に居る。グラウンドでは生徒たちが、野球をやっている。すると打った球が場外に外れて、私の方に飛んできた。私はそれを拾うと投げ返してやるが、コントロールが悪すぎてちっとも中に入らずに戻ってくる。数回繰り返してもまだ駄目で、そのドラゴンボールみたいな球がまた帰ってくるので、気合を入れて殴った。するとそのボールが粉々に砕けた。

＜解釈7＞運動神経がないのは生まれつきですが、鋼鉄の玉を打ち砕くほどの力はおよそありません。

＜夢8＞私は学生で、就職活動をしている。今日はいつもお世話になっている就活課に、彼女と一緒に菓子折りを届けた。彼女の実家は、由緒のある高級和菓子屋なのだ。そして和菓子差し入れの本当の目的は、彼女を皆に自慢することだった。それが終わって私は早くも、次のデートの約束を取り付けようとしている。

＜解釈8＞本物の私が、こんなにもてるわけがありません。それより彼女にしつこくし過ぎて振られないかが、心配です。

＜夢9＞うちに数人の大工がやってきた。嫁様が頼んだものらしい。あっちこっち修理していった。見ると変にモダンになっている。仕事が終わった後で、大工さんたちにお茶を出した。すると一番若い大工が一升瓶の酒をラッパ飲みして、ほかの大工はお茶のみだ。どうやら皆さん車でのお帰りで、若い大工が代表して「接待に満足した」ことを態度で示したものらしい。大工の棟梁が帰り際に、「この辺にも中国人のけばけらしい家が増えちゃったなあ」と残念がっていた。

＜解釈9＞私の実際の家は戸建てではないので、こんな修理は要らないはずなのですが。

3、戦史学事始め

戦前の陸軍大学校や今の防衛大学校には、「戦史学」と呼ばれる分野がある。過去の実際の戦争を紐解いて、①勝因や敗因は何か、②自分ならどう戦術を建てるか、等の思考実験を行うものである。

これらの組織の教科書は、おそらく内部限りの扱いであろう。だから近いところで学研が編集した、「世界戦史2 英雄かく戦エリ」を参考にして、自分も演習をしてみた。その上澄みを以下にまとめる。一言で言うと戦いの多くはドラマのように単純ではなくて、「常勝将軍とダメ皇帝」のような図式的捉え方はできない。

戦いとはどちらにも運不運があり、目測の誤りもあればラッキーな成功もある。また肝心な時での内部分裂すらある。だが大切な点をあえて挙げれば、①勢い、②地の利とその熟知、③聡明な指導者と熟練した将軍、④兵士の士気、の4点であろう。勝った国が次の戦いで負けることも良くあることだ。この辺は戦術に限らずに、人生の指針にもなる。

・サラミス大海戦(BC480年、ペルシャ vs ギリシャ)

当時のペルシャは現在のアラビアも含む大帝国で、時の帝王はダレイオスであり、領土拡張の次の目標はギリシャであった。他方ギリシャは多数の都市国家から成っていて、各ポリスは勇敢なものの余りに小さい。また周辺にはペルシャにへつらう国もあった。

この戦いは端的には、①兵站線の長いペルシャ vs. ②ともすればまとまりに欠けたギリシャと言う、どちらも弱点がある者同士の戦いであった。戦いを仕掛けたのは、もちろんペルシャの方である。戦いは通常は陸戦が主力で決まるものだが、この戦いの場合は海戦が雌雄を決した。

個々の戦闘はペルシャが数で圧倒的であった。それにも拘らず明らかに不利なギリシャが奇跡的に勝てたのは、以下の理由である。①ギリシャ側に有能なまとめ役が居り又各ポリスも危機感により結束せざるを得なかった、②ペルシャ側は船団が嵐や疫病に襲われる等不運であった上にこの海の複雑な地形をこなせていなかった。

・マルタ大攻囲戦(1565年、マルタ騎士団 vs オスマントルコ帝国)

マルタ騎士団の前身はヨハネ騎士団で、初期十字軍がエルサレムを奪還したのちに巡礼団を保護する目的で設立されたものである。これがイスラムに押されてキプロス、

瞑想録(その24)

ロドス、クレタと退却し、ついにマルタに至った。マルタは小さな島だが地中海の真ん中にあり制海権の要害であった。

他方この時のオスマントルコの皇帝は著名なスレイマン大帝で、イスラム圏を大きく拡張した人物である。マルタを落とせば次は念願の、「バチカンをモスク化できる」場面にあった。同じ理由でキリスト教側も、マルタは譲れなかった。

互角の戦闘が続き一進一退であったが、結局キリスト教側が勝つ。①キリスト教はエルサレム発祥であるがその宣教成功地は大きく離れたヨーロッパであり、その長い兵站をキリスト教側は保ち切れなかった。②逆にマルタの場合はトルコの兵站線が延びすぎたということであろう。

・奉天大会戦(1905年、日本 vs ロシア)

日本の満州軍とロシアの極東軍は、「ロシアが奉天に居座り日本がこれを除く」と言う形で戦闘を行った。数字上の軍事力では機関銃数を除いて、ロシアの方が圧倒的であった。会戦は20日と言う長い間の硬直状態で、個々の戦闘の勝敗は多分に5分5分であった。

大軍であるためもあって、両軍とも動きは機敏でなくかつ効率的でもなかった。結局日本軍が僅かの差で、「一気に中央突破で奉天をついた」形をもって両軍とも戦闘を終了した。そしてこれが世界にも、「奉天会戦の終了」と認識された。

ロシアの弱点は、極東軍首脳部とモスクワ中央の間に重要な齟齬があったことだ。これは日本側には幸運だった。もう一つ重要な点は、日本の実力からしたら「奉天の時点で戦闘は辞めて政治決着に渡さないと戦争は負ける」と言う、謙虚な認識があったことである。

この本には以上3つの戦いの他に、以下の5つの戦いが載っている:

・城濮の戦い(紀元前632年、春秋時代の楚vs晋)両者ほぼ互角、陽動作戦がたまに当たって晋が勝つ。

・釣魚城攻防戦(1259年、モンゴルvs南宋)、勢いに乗ったモンゴル(モンケ・ハン)が、競り合いののちに勝利する。

・イエナ・アウルシュタットの戦い(1805年、ナポレオンvsフリードリッヒ大王)、フランス革命と人民勝利の余波に乗った、ナポレオンの勢いと才能の勝利。

・タンネンベルク殲滅戦(1914年、ドイツvsロシア)、ドイツにヒンデンブルクとルーデンドルフの名指揮コンビがあり、他方ロシアは近代化が遅れた。結果はドイツの圧勝。

瞑想録(その24)

・ユトランド沖海戦(1916年、イギリスvsドイツ)、戦艦絶世期の、「歴史のイギリス」対「技術のドイツ」の戦い。結局はイギリスが底力としての総合力を発揮して勝利。

なお戦術学習のための戦史学と言う観点からは、全体概観よりも個々の戦闘の詳細検討の方が重要だ。でもそれをここにまとめると長くなりすぎるので、省略した。

4、物語化(その2)

物語化(テンプレ化)とは次のようなものである。①人が後天的な経験を、生物本来の目的である自己保存に有効に用いる目的である。②本能の外延部に、いわば「拡大本能」として持つ。③整理されメタ知識化され無意識化された、暗黙知としての脳作用形式のことである。

この作用を物語化と呼ぶのは以下の理由である。①この作用が例えば元素記号については最初の20個もまともに覚えられない人がポケモン800体については特性や技や性格等をすらすら言えて使えると言う、情報学的矛盾への回答である。②その理由は「そこに物語が存在するから」という洞察からである。

ところで人の脳は約300億個(30ギガ)の脳細胞を持っているそうだが私が同時に覚えられあるいは考えられる異なった事項の数は、高々3個である。優秀な人はもっと多いかもしれないが、普通はこんなものだろう。たいていの場合は1個でいいだ。

これはおそらくアナログで柔軟に感じてものを見て本質を見極めると言う行為が、それだけスパコンもはるかに及ばないような大容量が必要だと言うことを意味するように思う。なおこの主張は、「将来スパコンも能力が飛躍的に向上すれば心がもてるようになる」ことを意味しない。

ところで先日、TV人生相談で次のようなものがあった。まず相談者は高齢の元開業医で、引きこもりのもう良い年になる息子がいる。相談は「私は余命いくばくもないので不出来な息子の将来が心配です」と言うものだった。詳細は以下のようである。

「今は8千万円ほど貯金があって息子に残せるのですが、息子は気が向くと考えもせず高いオートバイを買ってしまうと言うような浪費壁があります。息子は人生を全うできるでしょうか。親戚でもあればそれに預けて息子に定額を渡せるのですが居ませんし、弁護士も信用ならない現代です」。

瞑想録(その24)

まあ結構ある種類の、ある面贅沢なまたある面深刻な悩みの相談である。そしてこの質問を聞きながら私は勝手に回答者になって、しかも別のことをしながらのついでに、心の中でこの元開業医に対する自分の回答を述べていた。

「8千万円、それなら安泰だね」、「浪費壁、それだと将来は分からないかな」、「親戚に預ける、それは盗んで下さいと言っているようなものだ」、「まだ他人の弁護士の方が安全じゃないか」、「家庭裁判所とか信託銀行とかに頼めないのかね」と言った感じだ。

そしてそう心の中で答えた後で、余裕で気づいた自分の頭の作動原理を振り返ってみた。質問の重さや複雑な状況設定を考えると、もし私の頭で真面目に答えるならば、この問題に集中しないと答えられないほどの重い問題だ。そんな問いについでに答えた自分とは、どういう状況なのか。

やはり以前に挙げた記事で、横浜で東武線の車両を見た時の脳の働きを分析した。その時は動画のような絵とまではいわないが地下鉄路線図(ネットワーク図面)が頭に浮かんで答えを出したのだが、これほどに頭を占める問題はまずこの問題のみに集中しないとだめだ。

ところが先の人生相談のケースでは、頭に8千万円分のお札の絵が浮かんだわけでもなければ、開業医のプロトタイプも引きこもり息子のプロトタイプもバイクの絵も一切脳内で浮上しなかった。いわばパソコン的に条件反射的で、これらの問いに答えていたのである。

ではどのような原理で答えていたのかを振り返ってみる。するとここで以前提案して本日も冒頭で紹介した、「物語化」が出てくる。つまりほとんど法則になったテンプレートに照らして、頭が反応していることに気付いた。もうパターン化しているのだ。

絵画よりは論理に近いが、論理のように固まってもいない。もっと脳の中心近くにあるいわば「本能の外延」と言った辺りの自動作動である。そしてその大元は似たような体験の積み重ねとエッセンス化、要するに相場観のようなものである。これが物語化の実態であり効用である。

「今時3千万円でも貯金は多い方だよな」等々、知見のエッセンスが脳のかなり深いところに、いわば本能より複雑に広がった葉のように出来上がっている。これが暗黙知

瞑想録(その24)

として、突かれて出番として反応して、わずかなエネルギーで励起して反応している感じである。

ちなみにこれらの物語化テンプレートは、すべてが自分固有の経験の積み重ねに基づくということでもない。例えば何度か似たようなニュースを聞いてなるほどと思ったと言うような伝聞知識も、もちろん精査した上ではあるが肥やしになっている。

もう一つ別の例を挙げると、先日何気に「もう12月だから台風は来ないよな」と思った。きっかけもなく突然にしかし軽く思えたのだが、この時も台風の絵も天気図の絵も12月の景色も全く浮上しなかった。これも状況が物語化されている典型例ではないか。

だからほかのことをやるついでに、いわば片手間でこれだけのことが答えられたのだ。これも脳の働きの1つの典型ではないか。

5、気づきの地平

「三島由紀夫の『憂国』の主題は、極限における愛(エロス)と死の双対性である」と言う気づきを、先日記事にした。本日はこの気づきを例に、人の脳における気づきの手順を見てみたい。

この気づきには賛成する人もしない人も居るだろうが、一応賛成の立場に立って感情移入してもらうと分かりやすい。またこの気づきをあえて本日の瞑想のネタとするのは、自分程度の者には上出来のいわば「限界的気づき」だと思えるからだ。

「双対」の元の意味は数学の用語で、「いくつかの概念を二つずつ対応させるとき、定理が1対となってそのおのおのが同じ構造をもつこと」を言う(コトバンク)。身近な例としては、①正多面体同士の関係(正八面体と正六面体は面と頂点の入れ替えで互いに移り合う)や、②電気と磁気の関係(電場で成り立つものは磁場でも成り立つ)がある。

元ネタの著者で天才数学者のフレンケルも、「現代の数学は対称性と双対性が指導原理である」と表明している。なお双対にはもっと広い「普通の」意味もあるが、今回の気づきは数学用語の双対を基にしているので、元ネタはこちらとする。

瞑想録(その24)

さて気付きそのもののきっかけは、次の記事である。フレンケルが三島由紀夫の「憂国」の映画版を見て、「その趣旨には賛同しなかったが映画のシンプルさに感銘を受けた」。この記事が400ページもある数学啓蒙書の、ある部分に出てくるのだ。

元の本は400ページの16章もあって、「素人向きに分かりやすく」とは言いながら最先端の数学を解説した本だから、もちろん難しい。その記事のところどころにバラバラに、「双対性」、「三島」、「数学の大統一」と言った言葉が「相互の脈絡なく出ていた」と言うのが、与えられた設定状況である。

この厚さで内容ならおそらくは、途中で読むのを辞めてしまう生真面目な読者も多いことだろう。そしてその我慢の果ての最後の章に、今回の気づきの核はあった。まあ強いて言うならば、「我慢が報われた」と言うことであろうか。

ちなみに私はこの半年ほど前に、偶然に「憂国」を読んでいだ。三島の本にしては分かりやすい方だったが、特別に感銘したわけでもなかった。そしてその時に三島の主張が、「死とエロス是一体物」だと言うことは分かった。だが三島が憂国で、それ以上の理系的解説などしているわけがない。

さて以上が、私がフレンケルの厚くて難解な本を読み終えた時点での所与である。これらの砂漠のように茫洋とした背景からどうして、「憂国の主張はエロスと死の双対である」と言う「逆転の気づき」が転がり出たのであろうか。

フレンケルの本を読み終えた時にはその数学的内容について、全体としては自分なりに「なるほど」と思った。また彼が最後の章で憂国に言及した時には、事前に「憂国」を読んでいたのはラッキーだとも思った。だがここで特記すべきは、頭の中が単に「読了した」で終わらなかったことである。

敢えて表現するならば頭の広いところの端と端で、「何かが欠けている」あるいは「何かがまだ隠れている」と言った漠然な感情が湧き出た。そしてその感情をもっと特定しようと、いわば頭の広い範囲を試行錯誤で狭めていったところ、「どうもそれは憂国のテーマにあるのではないか」と言う方向に徐々に収束してきた。

そして憂国の内容を再度振り返ってみると、「あの本がエロスと死の密接な関係について描いたものだ」と言うことは読んだ時に分かったのだが、その密接な関係を自分は言葉に表せていないところに問題が残っているのだ」と言うヒントが、やはり試行錯誤の後に徐々に見えてきた。

瞑想録(その24)

そしてさらに瞑想を続けて自分の脳を客観化するうちに、なぜフレンケルの本を読んだ時にことさらに「憂国のテーマを言葉で表すべきだ」と感じたのであろうかと言う、素朴な疑問が沸いてきた。ここまできるとかなり絞れて役者がそろい出た感じがした。

あとはしばらくの瞑想ののちのジャンプで当初の「欠けていたもの」が、「全体を通したキーワードとしての双対性か！」と閃いたと言うか、天から降ってきたと言う感じである。このひらめきが言わば、最後の決め手となったわけだ。

もちろん個々には論理のジャンプもあって、数学の厳密語である「双対性」を文学に用いることの正統性は残る。だがここは私が数学の素人であることが幸いして、事物を厳密に考える訓練を受けていなかった。そのために本能のジャンプ的な応用が働いたのだ。

「憂国のあるいは三島文学のエロスと死の強固な結合は、数学における双対のいわば『密接な関係をもって互いに映りあうものが同時に補って合わせて1つの勘全体になる関係』に極めて近くて、言葉の誤差の範囲内なら転用するとちょうどツボにはまる場所にいる」ことに気付けたのだ。

この気づきは頭が良くない私にとっては結構殊勝の出来だったと、嬉しく思っている。この気づきはコペルニクスの地動説と同じく先例のおよそない、事前に脳内に応用可能なテンプレ的な物語が一切ない時点での気づきであった。

その意味で人の気づきに良くある「連想」とか「当てはめ」と言った陳腐なものは全くない、純粋な閃きである。そしてその気づきの最初のきっかけは今振り返ると、「何かはまだ十分でない」と言う「かすかで漠然な不自然感」だったようだ。

この気づきを通してまとめると、「双対性を指導原理としていたフレンケル先生が、憂国のテーマであるエロスと死の双対性を見落としていた」と言う構図になる。その数学者の職業病としての機転の欠落が、ある意味矛盾で面白い形になった。だが「漠然とした不足感」の時点で、その予感はずでにあった。

まとめると気づきやひらめきの発端は、「何か足りない」と言う漠然とした「不自然感」のようだ。

6、最近読んだ小説3冊の紹介

最近読んだ小説を3冊紹介する。ちなみにこの3冊を選んだのはほとんど偶然で、強いて言えば題名と表紙デザインと直感のみだ。

それに加えるならば、①新しい(出版から10年以上たっていない)ことと、②およそ教科書に載りそうもないことを条件として、たまたま掴んだものである。古いものや人畜無害なものは読むだけ時間の無駄だ。そして読んだところ予想以上の出来だったので、ここにまとめるものである。

(1)、東京ダモイ(鍋木蓮著、2006年)

第52回江戸川乱歩賞受賞作。賞で分かるように推理小説である。題名の「ダモイ」とはロシア語で帰郷の事であり、終戦後シベリアに拉致された日本人たちが、心から待ちわびたことである。

事件は舞鶴港に、外国人老女の死体が上がったことに始まる。その後の警察の調査でその老女はロシア人の元看護婦でラーゲリに勤務していたことと、及び日本人身元引受人がその時にラーゲリ内で死亡した元兵士の孫であることが判明する。

他方で自費出版専門会社の若い営業は舞鶴近くの田舎で、俳句集の出版を希望する老人と会った。その老人の出版の条件とは、「会社の宣伝報に大きく複数回乗せること」である。そして自費出版の原稿の内容は、ソ連拉致時での句会の俳句集であった。

ところがその老人が、ロシア老女の死亡記事を持ったまま失踪する。事件全体のヒントは、その俳句集にしかない。そこで出版社と警察が独自になぞ解きをする試行錯誤の過程が、この小説の一番の読みどころである。著者のこの方面の蘊蓄には感心する。

説明が大きく進展するのは出版社の上司の女性が、句集に出てくる5名の俳号が中国の地方の「5すくみじゃんけん」にちなんでいることに気付いたことだ。加えて引き受け男性の祖父が実はトリック的な方法で殺されており、俳句集もその犯人への通告の暗号であった。

そこからたどって犯人は、かつての句会のメンバーで今は苗字も変えて老人ホームの経営をしている男性であると判明する。警察は物的証拠も得てその老人の逮捕に至るが、身元引受の男性も句集を残した老人も既に巧妙に抹殺されていた。

瞑想録(その24)

(2)、恋歌(朝井まかて著、2013年)

明治初期の著名な歌人で、今はむしろ「樋口一葉の師匠」として知られている中島歌子の生涯を辿った、伝記的小説である。その生涯は彼女の一葉とは別の弟子である三宅花圃(かほ)の眼を通した回想の形をとりつつも、実は著者自身の目を通した伝記あるいは女性一代記だと言える。

歌子は江戸末期に、水戸藩に出入りしていた江戸の豪商の家に生まれた。そして水戸藩士と結婚して水戸に移り住むが、当時の水戸藩は尊王攘夷を訴える水戸天狗党と佐幕に徹する諸生党の、血を血で洗う政争の真っ最中であった。

天狗党は挙兵するも朝敵の汚名を着せられ、歌子の夫は討ち死にし歌子ら天狗党の家族も牢獄に繋がれる。その牢獄で捕らわれ人たちがあるいは病死しあるいは処刑される中で、歌子は奇跡的に逃げ延びる。そして江戸の生家まで逃げ延びて明治維新を迎える。

その後自立して歌で名をはせて、その末期には皇族からも見舞いが来るほどになる。ところが歌子が花圃に残した遺書には意外なことに、不倶戴天の敵である諸生党の、頭目の唯一生き延びた娘の心配が記されていた。しかもその娘とは、実は花圃が養女にした澄であった。

どこまでが史実でどこからが創作かは分からないが、女性の眼から見た時代に翻弄される女性の姿と心が描かれている。なお天狗党の乱が背景になっているものの、内容はもっぱら入牢中の心身の苦しさや無謀な仕打ちである。もし天狗党の詳しい顛末を知りたいなら、「天狗騒乱」(吉村昭著)の方を勧める。

(3)、天使の柩(村山由佳著、2013年)

母がキャバレーの女給出身でしかも別の男と逃げた女性であるために、家族一同から毛嫌いされ自分でも自分のことを「淫乱ブス」としか思えない15歳の女の子茉莉が主人公。

人生がすべてヤケで学校にも行かず投げやりで人を信じられずに、半ヤクザのダメ男のヒモをやる毎日だった。だがある日公園でいじめられているネコを助けたのがきっかけで、30代の売れない絵描きである歩太(あゆた)さんと知り合う。

瞑想録(その24)

そして茉莉は歩太さんに、「とても純粋で素直でかわいい」とか「君が居ると絵がはかどる」などと言われて驚く。それ以後茉莉はしばしば助けた猫のザボンの様子を見たい気も有って、歩太さんの家を訪ねるようになる。但し心まで許したわけでない。

それ以後いろんな出来事があり、ヒモ男の先輩ヤクザにも誘拐されそうになったりする。そんな時に再び運良く歩太さんに助けてもらう。でも果たして歩太さんに、本当に下心はないのだろうか。さらに色々あって茉莉は、「一度だけ他人を信じてみよう」と勇気を出してみる。そして結局茉莉は歩太さんの家の養子になって、話はめでたく終わる。ちょっとあっけなかった。

ちなみに読んだ後で知ったことだが、この本は著者の「天使シリーズ」の最終巻であって、シリーズ全体の主人公はむしろ歩太の方だと言うことだ。だからシリーズの過程で、歩太自身も成長していたのかもしれない。

7、本能とは

当ブログは「素朴な疑問と意外な気づき」をキーワードとして、かつ特定の分野にはまらない「万年素人主義」を基本的態度として、世の中の諸事象を瞑想している。

中でも「科学至上主義」に懐疑的である。そしてその科学的手続きは、私の大嫌いな薄っぺらの創作宗教であるキリスト教である。それらの共通の根っこは合理主義とデジタル主義である。これらのことから、この正反対であるアナログ及びアナログ演算の話題が多くなっている。

そしてアナログを突き詰めるとその1方向として、脳の作用機序に至る。このことからあくまでも「自己を見つめる瞑想」を手段としての、脳や本能の作用に注目することとなる。再度断るがこれは自分の納得のためであって、決して科学ではない。

さて、その本能についていくつかの素朴な疑問が沸いている。だがいずれの疑問も「少し瞑想すれば何らかの答えがでる」と言った単純なものではない。だからここではとりあえず疑問の数々を、解答なしに列挙しておくこととする。

・すべての生物の設計図はDNAに記されていると言う立場からは、生まれつき誰にもあるいは昆虫にも存在する本能と言う形而上のものについて、これがDNAと言う物質や化学結合に既に刷り込まれていると言うのは、どうやってありうることなのか。

瞑想録(その24)

本能の役割は個の保存と安全と言うきわめて抽象的なものであり、この手の能力は「太陽に向かって葉を広げる」と言うように、植物にすらある。「全てはDNAと言う物質」と言う発想は、天皇機関説程危ういようにも思う。

・今の計算機や機械はどんなに偉大な成果を上げてもとえ棋聖に勝とうとも、自分では何を達成したか理解していないと言う意味で人や生物と決定的に異なる。それならOS(基本ソフト)に「自分を理解する」と言う機能を組み入れさえすれば、機械は感情を持つのか。またそのようなOSの組み入れ方はあるのか。

・機械に苦手な行為として、「マクロな理解」がある。話の流れ全体を掴んでかつ主要部を要約できる能力、あるいは大意にそれないように話全体を作る能力だ。似た能力なら「事前に決めたキーワードのみを抽出して組み立てる」と言う方法もあるが、これは近似に過ぎない。

この能力を人は持っているが、どのような脳のプロセスによって達成できているのか。シナプス・ニューロン説では機械的理解しかできない。

・アナログに特有の演算とは、ある気付きを基にしてそれから概論推論的に大まかなところで(数学のように絶対全部でなく)他の気づきに至れる道筋の事であろう。この連鎖過程は、具体的にどうなっているのか。暗黙知であって表現しにくい部分もあると思うが。

・以前記事にした「三島由紀夫の『憂国』のテーマはエロスと死の双対性である」と言う気付きを例にすると、脳空間とは平面や整数のように調子の良すぎる超対称ではない。だが他方で、感情の蟻地獄と言った超複雑モデルを出す必要もないように思える。この辺の理解はどうすれば良いのか。この気づきをよりメタにするとどうなるのか。

・芭蕉の俳句の例えば「静けさや岩に染み入る蟬の声」、蟬を季語としながらも「やるせない蒸し暑さ」を詠んでいると思われる。だがこの句をどのように説明展開しようとも、元の句を汚すようなつまらない説明にしかならない。暗黙知としては多くの人がほぼ共通に持てても、それを形式知で近似する方法がおよそない好例だ。

・先日「シンガポール風焼きビーフン」を食べて「ふーん、こういう味か」と思ったが、それ以上表現する言葉がないので他人に伝えられない。強いて言えば「同じシンガポールのラクサに似た味」ではあるが、苦しい。だが苦しくとも近いと言うことは、脳空間に常にとは言わないが遠近があると言うことだ。位相が入る程ではおそらくないが。

瞑想録(その24)

・先日、南洋の先住民族が木の皮をなめしてタパ(フェルト)を作った、その作品展示を見た。同じく繊維ではあるが機織り技術を持っていないための、いわば苦肉の技術だ。だが木の皮からフェルトを想起する閃きを、決められた手続きに従って繊維を重合合成する技術と比べてみる。もちろん後者の方が遥かに心地良いものができるのだが、気づきの高さとしては明らかに前者に軍配が上がるだろう。

・人には物の認識過程の一つとして擬人化がある。これは結構本能の近いところでやられているように思う。だからこそ人にフレンドリーであって、ゲーム等で流行るのだ。擬人化は同時に一種のひらめきだ。似たようなひらめきが重なると人に特有の集約と言う応用動作により、物語化つまりテンプレ化する。だがここまで行くとその気付きはもはや、アナログと言うよりデジタルになってしまう。これは矛盾ではないか。

8、「日米中 IoT 最終戦争」を読んだ

題にある通りの本、「日米中 IoT 最終戦争」を読んだ。

ここで IoT とは「全てのものがインターネットにつながる」と言う、近未来に確実に来る状態を言う。ここでネットに繋がる物のほとんどは人ではなく、「機械から計算機へ」である。つまり装置の状態の常時監視を、機械で自動的にやるようになる世界のことだ。

この本の著者は、「産業タイムズ社」社長の泉谷渉さん。この人は文系の出身なので技術の細かい点にとらわれずに、機械知能化に係る業界の全貌を大きく俯瞰しかつ近未来を予言している。本の発行は17年2月でまだ新しく、東芝の不正会計も織り込んで語っている。

この本は業界のウォッチマンが書いただけあって、どのページにも「なるほど」と思わせる慧眼が光っている。だから下手にまとめるとそれだけで情報が減ってしまうと言う問題はある。とは言えまあまず大目次を羅列するのが、一番分かりやすいだろう。

序章 IoT が「第4の産業革命」と呼ばれる理由

第1章 巨大市場をめぐって、日本製造業の大攻勢が始まった

第2章 アメリカと中国、2つの大国の次なる戦略

第3章 東芝はフラッシュメモリーで大復活を遂げる

第4章 ソニーはイメージセンサーで再び世界一を目指す

第5章 センサー王国、日本のすごすぎる技術

第6章 次世代自動車をめぐる激烈バトルの行方

瞑想録(その24)

第7章 今後5年で7倍に大爆発するロボット市場を制するのは誰か

第8章 IoT 最終戦争の行方と日本の選択

そして各章には副題がついていて、それが上記で投げかけた疑問への回答にもなっている。

第1章 デジタル家電の時代が終わり、次なる戦いは IoT へ

第2章 IoT 市場をめぐる争いは日米中の新・三国志

第3章 ビッグデータ時代の到来で新型半導体の需要は大爆発

第4章 “オールジャパン連合”で外国勢を迎え撃つ

第5章 センサー市場大爆発で、日本のお家芸に猛烈な追い風が吹く

第6章 急成長する車載センサー&部品で日本が圧勝する

第7章 「カスタマイズ化」で他を圧倒する日本のロボット技術

まあ大雑把に言うと、こういう内容の本だ。この人の主張は、①今は IoT 大戦争のまさに幕開けである、②IoT 時代の半導体や部品の合言葉は「カスタマイズ」(大量均一生産の反対)だ、③IoTはCPUよりもセンサーとロボットの時代でこういう「細かい作業」は日本のお家芸だ、の大きく3点であろうか。

スマホや家電で今の日本はさえないが、これは技術の遅れではなく人件費の高騰等による売り負けである。このことはこの本に依らずとも周知の事実だ。だがこれから来る IoT の時代から見ればスマホや家電などほんの序の口で、本番には市場はこの何百倍も巨大になる。

もうすぐ実用になる車の自動運転を例にしても、車1台がスマホ100個分くらいのセンサーを機械統合してAIでさばく時代である。その時代の売れ筋は、今日本が売り負けているCPU系よりもセンサーが主体になる。そしてその市場の半分は実は日本が握っている。

中国は最近成長が目覚ましく、間もなく世界を席卷するかの感がある。だが中国の国家ぐるみの巨大投資の第1の目的は、「雇用の確保による民心の安定」である。しかも設備のわりに人材がないので、IoT の時代には息切れして失速するであろう。

米国は国防と絡んでいて、国の威信がかかっているので侮れない。現に自動車運転でも、AI応用技術と言う肝心の所は米国が圧倒的に進んでいる。IoT も肝心の所は同

瞑想録(その24)

様だ。それにしても日本は周辺の、センサーとカスタマイズ関係で強みを発揮するだろう。

この勢いは車とか産業機械等の電機産業はもちろんのこと、農業、医療、介護その他あらゆる分野に及ぶ。しかもある程度までは共通技術で行ける。そのため肝を握った米国は強いし、かつこのまま強く行き続けるだろう。米国はそもそもシステム系が強い。

ただしこの広い意味でのIT業界も、他の製薬や電機等と同様に開発プロジェクトがどんどん大型化して、体力勝負になってきている。そのためには日本も、企業の旧来の枠組みを超えた大同団結が不可欠になってくる。企業買収も大型化するだろう。

まあ以上が、この本の敢えてまとめたとした場合の要旨です。でもこの本を1冊読んだだけでこの未来型大産業の基礎用語や基本的考え方をほぼマスターできるというのが、この本を読むことの最大の価値と言えるのではないのでしょうか。

この人の結論は暗黙に「日本だけが頑張れば」と言う、アベノミクスと同様の手前味噌が多少感じられます。まあその分は割り引いて考えるにしても、この本は依然としてその先導役になってくれます。特に日米中は同時に複雑に供給し合い売り買いする中で、「一人勝ち」はあり得ません。

またある書評に、「この本の賞味期限は2年くらいだろう」とありました。私も賛成ですがその根本理由はまさにこの本が指摘しているように、この業界が本の題名とは裏腹にむしろ「今が乱世前夜」にあるからでしょう。ある意味以前に紹介した戦史学の本と似たような、大攻防のにおいがします。

9、コーヒーとドーナツ

最近のコンビニを覗いてみると、売れ筋商品に関して明らかな勝敗がある。すなわちコーヒーは定着した一方で、ドーナツは同じほどの鳴り物入りの宣伝の割に、単なる片隅の一商品に終わってしまったことだ。

この点については最近に「感じる経済学 コンビニでコーヒーが成功して、ドーナツがダメな理由」と言う解説書も出ているし、同じ著者により下記のサイトで解説されている：

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/49504>

瞑想録(その24)

この著者によると勝敗の原因は、「コーヒーの場合は新規需要が創出できたが、ドーナツの場合は単にパイの奪い合いだった」と言うことだそう。おそらくそうだろう。だが分析をこの時点で終えてしまっただけでは十分でない。将来にまた似たような失敗を繰り返すことになるだろう。

「なぜコーヒーは新規需要が創成できてドーナツにはできなかったか」と言う所まで掘り下げて、初めて教訓が生かせると言うものだ。コンビニ側としてはおそらく、「コーヒーとドーナツ3個をまとめ買いして昼食にする」みたいなイメージを描いていたのだろう。でも思惑通りに行かなかったのだ。

本日はここの所を瞑想してみる。思うにコンビニコーヒーが出るまでコーヒーとは、スタバのように座って飲むものだった。当然に場所代と言うか「テーブルチャージ」がかかって、1杯300円とかになる。ところがコンビニコーヒーなら同じほど美味しいものが、テイクアウトなので1杯100円で飲める。

これは客にとってもありがたいことだが、他方のコンビニだって1杯で100円も入れば十分に利益が出る。つまりウィンウィンの関係だ。ところがドーナツの場合は、「歩きながら食べる」と言うのがあまりイメージできない。加えてドーナツの値段設定だ。

ドーナツ専門のミスドールの場合1個130円前後だが、もしこれに対して「コンビニドーナツは80円」とかにしたら、あるいは売れて文化になったのかもしれない。ミスドールの場合は場所代も入れて130円なのだから、持ち帰りに80円は不可能でないように思う。

だがなぜかコンビニはそうしなかった。隅っこにつるされている今でもまだ130円だ。理由の詳細は分からないが、とにかくどうしても粗利益を挙げたい事情があったのだろうか。結局は新文化を創成する余地と余力があったか否かが、コーヒーとドーナツを分けた。

ところでコンビニの商品全体を眺めてみると、「コンビニ特有の商品」はコーヒーとドーナツだけでない。もっと昔からあって今もなくなっていないものに、おでんがある。果たしておでんは成功だったのかそれとも失敗か。まあ長く続いただけでも、成功の側に入るのかもしれない。

それにしてもどこのコンビニも申し合わせたようにコーヒーとドーナツとおでん、これは

瞑想録(その24)

競争原理に鑑みておかしくないか。普通は新商品を他のチェーンに真似されずに、客を自分のチェーンのみに呼び寄せる玉にしたいものだし、ビジネスモデル特許とか法的措置だってあると思うのだが。

コンビニに特有の商品と言うとこの3つが目立っているが、実は多種多様にありしかも結構入れ替わっている。特におかずとかつまみとか弁当類とか冷凍食品とかは、大きくくりでは横並びだが具体的な内容は個々に異なっていて、一応競争原理とシステム多様性が生きている。

ところが皮肉なことに、この多様性の保持努力が返ってコンビニの寡占化を招いているのだ。コンビニも発生当初は「規格化された効率の良い個人商店」のようであったが、ここ数年はコンビニが飽和状態になって差別化が生き残りの条件になってきた。

差別化とはすなわちプライベートブランド商品の充実である。だが新商品の開発は、単なる規格化された個人商品のレベルをはるかに超えた体力勝負なのだ。これまでもエーエムピーエムとかサンクスとか多くのチェーンが食われていった。最近も私の地元のスリーエフが、ローソンの傘下に入った。

その時の社長のコメントも「この辺が体力の限界」と、体力に言及していた。もっともこういう構造はコンビニだけではない。有料ケーブルテレビも、薬品も、自動車も、半導体も、どの業界も新規商品開発がどんどん大プロジェクトになっていって体力勝負になり、今や大手の合併や連合も珍しくない。

この傾向は今後ますます加速するだろう。端的に言えば「少数のガリバーかさもなければよほどの地域性を有する老舗か」、そのどちらかしか残れない時代である。そして今はまさにその幕開けであると言えよう。大産業の自動車だって低公害、燃料電池車、自動運転、コネクティッドカーと開発テーマが山積みで、今後いくらでもうちやられる。

コンビニだって店員ロボット化とかカード自動決済とか、本業に限っても商品開発以外にも大問題や選択肢が待っている上に、銀行業など他業種にも積極的に進出しないと生き残れない時代だ。コーヒーとドーナツはそのほんの幕開けかもしれない。

10、黒川信重著「絶対数学の世界」を読んだ

瞑想録(その24)

始めに断っておきますが、私は数学の素人です。日本を代表する著名な数学者で東京工業大学名誉教授の黒川信重先生による、「絶対数学の世界」を読みました。この本は1月前に紹介したフレンケル著の「数学の大統一に挑む」と同様に、ラングランズ予想を最終目標に描かれています。

但しフレンケルさんの本が「素人にも絵を見るように分かってもらう」ことを念頭に描かれているのに対して、黒川さんの本はむしろ「ある程度理解ができた人に全体俯瞰を示す」と言った形で書かれています。このためにこの本は一般図書館にも置いてはあるのですが、むしろ専門書コーナーに置かれた方が相応しい気がします。

フレンケルさんが解析学からこの分野に入ったのに対して、黒川さんは整数論からこの分野に入っています。整数論と言うと普通思いつくのは素数の計算とか整数の素因数分解とかですが、この人の武器は「ゼータ関数」と言う関数の無限乗積あるいは無限級数展開です。

そのためにこの分野は、「解析的整数論」と呼ばれます。フェルマーの最終定理の証明のカギになった志村・谷山予想も、この分野に属します。このことを思えば、これはきわめて強力な数学の道具です。ゼータ関数では無限のトリックによって、普通は発散するような級数が収束したりしますが、それこそがご利益なわけです。

言い換えると整数や素数の解析に、関数と言う整数に限らない別の数学を使う方法です。私はどうもこういうやり方になじめません。整数は整数で攻めるのが正攻法であり、裏木戸から籠絡するようなやり方に潔さを感じません。便利な裏で何かうっかり最も重要なことを見逃しているような気がするのですが、現に偉大な成果を上げているのですから仕方ないと言う訳です。

似たようなやり方に幾何学を「形の幾何」ではなくて、それを群と言う代数に置き換えて群で解ける部分だけを解くと言う方法もあります。これも私は好きではないのです。幾何学の形の面白さがちっとも生かされていなくて残念です。私が数学を専攻しなかった理由もここにあります。

しかし私如きが気に入るか気に入らないかなどは、世の中ではどうでも良いことです。まあ愚痴は置いておいて、この本に沿って見ましょう。と言っても冒頭に指摘したようにこの本は、式こそ少ないものの専門用語や難しい概念を解説なしにポンポン出していくので、素人の私としては「ざっと見通した」と言う程度です。

瞑想録(その24)

それでもいくつか、気付いた点や感心した点がありました。以下にそれを列挙します。第一に感心した点は、この先生が日本の数学の「証明せずに予測だけを言うのは無責任だ」と言う風潮に反対していることです。全くその通りだと思います。人間は証明機械ではありません。学問にもロマンがあっても良いでしょう。

第2の点は「絶対数学」と言う、この先生が発明したタームにも関係します。「群や体や環」と言った代数学の基礎知識は本質的でなくて、もっとも基礎的なのは「モノイド」と呼ばれる単一元であり、かつこれは掛け算しかないものだという指摘です。だいたいの体や環なんて四則演算のお追従に過ぎなくて、全く知恵のないものです。

算数の発達はこの民族でも、①数字、②足し算、③掛け算の順序で発展して来ました。ところがモノイドの元はゼータの意味で「1」のみで、かつ演算は「 $1 \times 1 = 1$ 」しかありません。いきなり「掛け算こそが根源であとは派生物だ」としているわけです。

私も実はアナログの視点に基づいて従来からこれと似たような描像を描いていたので、この指摘には感動しました。ちなみに私の描像は、「世界の根本は1でなく無限であり、この無限を開くとか雫を垂らした結果できたものがデジタルとしての数になる」と言うものです。

この先生と共通の認識を持てた第3の点は、先生が「モノイドを追求すると点の本質が見えてきて、それはおそらく広がっているだろう」と指摘しているところです。私も「アナログこそが本質」の立場から、「点には実は広がりがある」と思っています。

第4番目にやはり賛同してやまないのは、この先生が物理学のファインマン積分の「絶対発散の困難」とゼータ関数の「不思議な収束」を並行現象と考えている、明記はしていないけれどもそう読めるところです。大胆な推測をあえてにおわず勇氣に、大賛成です。

第5番目に空間についての指摘です。線形空間のような調子の良いものがアприオリにあるのではなくて、「何らかの関数や作用素の動き全体を見ることによって本来の空間を決めよう」と言う提案です。私もアナログと親近性の高い脳の作用機序を瞑想するたびに、「線形空間から始めることが数学の浮世離れする根本原因だ」と考えています。

最後で第6番目の指摘です。先生の夢見る「世の中の最終秩序」が本の冒頭に出てきて、それらは基本的に古代ギリシャの世界観です。これは数論、幾何学、音楽、天

瞑想録(その24)

文学の4つなのですが、ここで数論は「静にして数」、幾何学は「静にして量」であると分類されています。ちなみに音楽は「動で数」、天文学は「動で量」です。

先に私の個人的意見と断って、「数論を関数でまた幾何学を代数でやるのは外道ではないか」と発言しました。このギリシャ発の先生も認める世界調和は、やはり「数論は数論で、幾何学は幾何学でやるべきだ」と主張してはいないでしょうか。

と言う訳で、夢を許す世界的数学者と不肖私の意見が奇妙に一致したことに、私はいくばくかの喜びと安心を得たという顛末です。

11、レストラン・モーリー(ランダム短編①)

今日もまた山の影から日が昇る。すがすがしい朝だ。天上にある時よりもなぜか大きく見える日の出の太陽に、盛男は拍手を打った。盛男にとってはどんなありがたい異国の神よりも、太陽こそが天照大神であり即ち守り神だった。

顔を洗うと盛男は軽トラに乗って漁港に向かった。朝の仕入れの時間だ。鮮のものは早くしないと、ほかの業者に競り落とされてしまう。まさに時間との勝負だった。そしてこれは彼の日課でもある、市場が休業する日曜日を除いて。

今日手に入れた食材は太刀魚とシイラと蟹、あとは地方の業者から送られてくる河豚と鮪の塊、これらを素材に今日提供する料理を考える。だから盛男のレストラン「モーリー」は出し物が毎日異なり、それがまた地元や常連の人気でもあった。

脱サラののちに独立してはや10年、もはやベテランの域であり、個人的にも妻子ある身である。嫁様は器用な手先を生かして、装飾小物を作っている。基本的に趣味なのだがモーリーの店内に飾るとか、時には販売もした。販売の為にフリマに出向くこともしばしばであった。

子供は1人で小学生の女の子、学校の成績はまあまあだが、いじめがないのが何よりの幸이었다。国語や算数よりも工作や音楽の方が得意なのは、母親似だろうか。もっとも盛男も勉強物は決して得意でなかったが。先生方にも可愛がられている。

店の名前のモーリーは明治初期に南洋諸島に移住して酋長になった森小弁から取っている。盛男は冒険とか移住とか南洋とか、そう言ったエキゾチック物にあこがれてい

瞑想録(その24)

たのだ。ちなみに店名は「盛男」からではない。もっともほとんどの客は店名を彼のあだ名だと思っているが。

南洋物が好きな彼の店のメニューも一風変わっている。今日の太刀魚はバナナの葉で蒸し焼きにする予定だ。シイラ、店では「マヒマヒ」と呼んでいるが、これはぶつ切りの刺身にして薄切りの鮪と並べる。最後に河豚と蟹、これは鍋だけど、南洋風に焼けた石を投げ入れて作る。

店は昼の部もやるけれど、あまり実入りはない。やはり儲けは夜の海鮮居酒屋の部だ。夜遅くて朝早いので、睡眠時間が細切れになって健康には良くないが、まあ仕方がない。同業の連中もみな似たり寄ったりの生活習慣になっている。

そんなある晩のこと、すでに結構酔った一団が店にやってきた。二次会か3次会と言うことだろう。良く見ると知った顔だ。盛男が勤め人だったころの上司と同僚たちである。皆さん課長は部長に係長は課長にと、1段階ずつ偉くなっている。

彼らは店に来るなり、「俺たち今夜はバーベキューをやりたい」などと言い出す。「ここは南洋風レストランです」などと言っても、「土人だってバーベキューくらいやるだろう」と譲らない。元上司でお世話になった手前強いことも言えずに、盛男はバーベキューをセットした。

「おいマリオ!」、元同僚たちは盛男を適当に呼びつけて、やりたい放題である。散々に食い散らかしてドンチャン騒ぎをした挙句に、「今度はこの棚の上のエビを焼こうぜ」などと勝手にイセエビを持ち出して網の上であぶった。だが今度は勝手が違った。エビが突然燃え上がったのだ。

これまで調子をこいていた同僚たちは、突然の予期せぬ事態になすすべも知らずに、泡を食ってぶっ倒れた。「あーあ、やっちゃった、そのエビは嫁様の大事な置物なのですよ」。工芸品が良く出来過ぎていて、客たちはそれが飾りではなく本物のエビだと勘違いしたのだ。

そのレジンで出来たクラフトのエビは、あたかも石油タンクに火をつけたかのごとくに、天井まで燃え上がった。しばらくして静けさが訪れた。「す、すまん」、部長になった元課長様が煤だらけの顔と焦げて穴の開いたスーツで、しょんぼりと頭を下げた。どうやら皆さん、少しは正気に返ったらしい。

瞑想録(その24)

「皆さん、南洋では酋長の指示に従うのが当然ですよ」、盛男が静かに諫めた。すると陰から一部始終を見ていた嫁様が飛び出してきて、「この置物は有名な作家さんの一品物で、50万円なのよね」と言う。部長様たちはひたすら頭を下げると、せこく飲食代だけ払って後ずさりし、我先にと退散した。

皆が帰った後片づけをしながら嫁様が、「あんなエビは何個でも作れるわ、会社員って本当にバカでせこいのね」と大笑いした。娘もドタバタや米つきバツタが面白かったらしく、笑っていた。まあ確かに雇われ人なんてあんなものだ。

今夜はちょっと変わった営業日だったが、不思議と不快感がなかった。むしろ会社時代のツケを返してもらったかの気持ちだ。こうしてちょっとしたエピソードを挟みながら、レストラン・モーリーの日々は続いていく。

* * * * *

本日の記事は、「適当にピックアップした3つの単語を入れ込んで起承転結のある短編を作る」と言う思考実験の第1回目の成果品です。今日入れた単語は、「独立、クラフト、バーベキュー」の3つです。たまたまもらったパンフレットから、適当にピックアップしました。

思考実験のポイントは、①ストーリーに起承転結があること、②選んだ単語が自己主張せず何気なく入っていること、③人工知能小説のように話が勝手にダッチロールしないこと、それに④面白いとか為になるとか話が全体として何らかの情報価値を持つことです。

作業を始める前にストーリーの全体構想は立てたのですが、話を勧めているうちにだんだん違ってきて、結局違うモチーフに落ち着いてしまいました。これは予想外でした。なお通常の蘊蓄記事の場合は、①意外な気づきまで至っているときにはほぼ予定通りで、②至っていないときは書きながら考えています。

なおプロの作家さんや画家さんたちがこの点に関して果たしてどうなのかは、私の如きが推し量れるところではありません。

12、戦争を知らない子供たち

瞑想録(その24)

もう半世紀近く古い話になって恐縮だが、70年代初頭と言えば第2次安保闘争の真最中のころだ。そしてその時がちょうどフォークブームに重なる。そんなフォークの時代に流行った歌の一つに、「戦争を知らない子供たち」と言う曲があった。

以下に1番のみを再掲する：

戦争が終わって僕等は生れた、戦争を知らずに僕等は育った、おとなになって歩き始める、平和の歌をくちずさみながら、僕等の名前を覚えてほしい、戦争を知らない子供たちさ。

そもそも安保や学生運動とフォークがなぜ時を同じくしてブームになったのか。問題はこれが「偶然なのか必然なのか」と言う点から考えを起こさないと不徹底なのだろう。だが本日はとりあえずこの問題は所与としておいて、今挙げた歌に瞑想を集中することにする。

この時代は日米安保条約の改定に加えてベトナム戦争に起因する厭世気分もあって、平和運動が変に盛り上がった時である。ところがこの歌は歌詞だけ見ると、あたかも戦争肯定の歌だ。「我々は戦争を知らないから半人前でダメ人間なのだ」と歌っている。

ちなみに歌詞がフォークと思えないほど変に理屈っぽい、これは後に大学の副学長にまでなった北山修の作詞であるからだ。こうして言わば「2重のハンデ」を負ったこの歌がなぜレコード大賞に輝くほどに流行ったのか、これは素朴に不思議である。

ここでこの曲の成立の経緯を説明しておく。北山はこの歌詞を最初は加藤和彦にもっていったが、即座に断られた。そして仕方なく杉田二郎にもっていったら、素直に曲をつけてもらえたと言う。そしてそのままジローズの持ち歌になり、レコード大賞にまで至った。

思うに加藤はこの歌詞に、フォークらしくないイデオロギーのにおいを感じて嫌がった。他方でその辺に鈍感な杉田は、歌詞の香りに関係なく自分の好きなメロディを勝手に付けたと言うところだろう。実際メロディに歌詞のイメージを生かした跡が、およそ感じられない。

瞑想して分かったことは次の点だ。第1にもしこの歌詞が「戦争を2度と許さない」と陽に主張した歌詞だったら、それこそイデオロギーそのものになってしまう。そうしたらあるいは共産党の党歌にはなったかもしれないが、およそ流行らなかっただろう。

瞑想録(その24)

だからそのところを上手にひねって、戦争と言う過激な言葉を出しながらも内容的にははぐらかしているのが、この歌詞の構成なのだ。そしてそのひねりが、当時の若者の心に微妙に同期したのではないだろうか。ただひねられているのは、北山の才能と言うよりも偶然だろう。

第2にこの歌のメロディである。歌詞とはまるで無関係に、明るくて歌いやすい。一度聞けば誰でも忘れない軽快さを持っている。だから歌詞が多少理屈っぽくても人々はさほど気にせず、メロディでこの曲を歌っていたのではないか。

私は試しにこの歌詞をちょうど同じころに流行った、「走れ！コータロー」のメロディで歌ってみた。こちらはダービーの歌で、歌詞もメロディも極めて軽薄で現世的である。そして気付いたことは、「戦争を知らない子供たち」の歌詞はこちらの軽薄なメロディとすら違和感がないことだ。

しかも「走れ！コータロー」など序の口だ。それこそ「炭坑節」だろうが「お座敷小唄」だろうが「軍艦マーチ」だろうが、短調の「母さんの歌」(♪母さんは夜なべをして手袋編んでくれた...)だろうが、思いつく限りのどんなメロディにも合ってしまう。

ちなみに軍艦マーチのメロディで母さんの歌を歌ってみたが、全く合わない。だから「何にでも合う」と言うのはむしろ例外的であって、そこに何かの理由があるのだ。つらつらと考えた結果その「戦争を知らない...」の歌詞に際立った特徴とは、むしろ極端な程のイデオロギーの無さではないか。

イデオロギーとか自己主張がないから、どんなメロディにも合うのだ。「戦争」などと言う議論の的になりそうな言葉から始まって物騒がらせる割に、歌詞全体はおよそ何の主張もないのだ。だからこそ好き嫌いなく多くの人に流行ったのだと、私は思う。

音楽の歌詞とメロディは結合著作物と言って、関係がないとは言わないが深くはないし絶対でない。ある意味いくらでも取り換えられる。そう言うと「作詞家は要らない」みたいな話に聞こえてしまうが、おそらく歌詞の意味は曲作りのヒントとして生かされているということだろう。

歌詞とメロディは互いにイメージを閃くヒントにはなって居るだろう。だが歌詞及びメロディにとって最も重要なことはむしろ、「それ自身で完結していて気の利いた単語やリズムの3つも入っていること」ではないかと思う。

13、今までの記事のエッセンス(その1)

今までに結構な数のまじめな記事を書いてきましたが、一定の方向がうっすらと見え
てきたように思えますので、ここで今までの記事のエッセンスを抜き出します。

・会話に見る理解手順：一期一会の人同士が専門的なことですら形式知であるところ
の言葉でダッチロールせずに理解し合える奇跡は、人が同じような本能と似たような
環境で育ったため似たような常識を有しているからだ。

・地味ハロウィン：瞬間芸は文字よりも写真の方が遥かに雄弁であるのは、ピクセル
のビット数が多いからではなくて画像の方が暗黙知に近いからだ。

・暗黙知的理解の構造：人の気づきや発意は暗黙知であるが、人はこれを形式知に
置き換えると言う絶望的に無謀なことを通してしか意思疎通出来ない。それでも通じ
ていると言う奇跡は、事を済ますのに完全理解が不要なためである。

・昭和8年の少年倶楽部：歴史とか地理とか文系物はひたすら暗記科目だと思われ
がちだが、本質は事態の流れ即ち物語であり、この物語が理系の証明の流れと並行
である。

・意味数学：論理学と言うと通例は形式論理しか学問にならないが、人の日常茶飯の
論理は意味も考慮に入れて初めて成り立つ意味論理であり、かつこちらにしか知恵
は入っていない。

・笑える間違いの構造分析：間違いやすいケースと意味を合理化しようとする脳構造
が上手く重なってしまい、かつその間違いの心理に感情移入できたときに、人は笑う。

・絵画か論理か：例えば棋士が定石と言うデジタルと盤の局面全体と言うアナログを
同時に使えるのは脳の不思議だと言われているが、多くの場合人はこれらを日常的
かつ自主的に適切に混ぜて用いている。

・数学と意味：論理までならともかく、「数学の世界では日常茶飯事をその解析対象に
できない」という意味で、数学は大きな限界を有して偏っている。

瞑想録(その24)

・数学の大統一について:大統一はホットな話題だが、この分野を外から見れば「高度な論理が構築できる」と言う極めて稀な条件をクリアできたと言う時点で、すでに共通原因があると言うだけではないか。

・数学と工学と検索:数学も工学も学問だが、宿命的に一番面白いところを外している。学術的であることよりも絶対再現性を外しても知恵が豊かな方が、遥かに生産的で面白い。

・読書に関する素朴な疑問:文字や文章は典型的な形式知であり、理解に時間と労力がかかる程には得るところはない。それでも文章に依らないと事の順序や論理は表現できないほどに、現代人は劣っている。

・ハザール王国:学問は証拠がないと語れない。他方で人は素朴には身近なことを知りたがる。この意味で学問は現実と乖離しており、しばしば無益ですらある。もっと役に立つ手続きが望まれる。

・形式知と暗黙知:暗黙知こそ真の知恵であり形式知は近似で不器用な必要悪だ。形式知について議論するのは無意味で、形式知からその奥にある暗黙知を抉り出させるのが地アタマの良い人だ。

・トイレの順番待ち:ちょっとした「補助線」で本質をえぐるのが真の数学的思考法であるが、現代数学や高校の数学教育のほとんどはこれから離れて、現実生活には無益なものになっている。

・古代人の心:科学技術が発達する前の古代人の素朴な気づきは、遥かに人にやさしいと同時に深いひらめきを伴っている。現代人の特に科学手続きはこの能力を意図的に封殺している。

・夢と解釈シリーズ:はっきりと意識はしていないが無意識に気になったようなことが良く夢に現れる。これが夢占いの根拠である。典型的な暗黙知であるが内容を他人に語る時点で情報が大きく損なわれる。

・戦史学事始め:人は単純な図式で理解したが、現実はそれほど単純でない。ただし掘り下げようとすればこれも切りがないので、学問的手続きにも限度が必要だ。

瞑想録(その24)

・物語化：有限回の経験や伝聞等を通して、人は本能の外側に起承転結していて応用力のある「物語」と言うテンプレートを形成する。この物語の発動の脳の負担は一部で済み、結果として人の安全を高める。

・気づきの地平：素朴な疑問の始まりはぼんやりとした「過不足感」であり、これを狭めていくと次第にその「ぼんやり」が意外な気づきへと行きつくことが多い。

とりあえず最近の2か月分の記事についてまとめてみました。全記事の約50分の1ですが、最近の記事ほど濃密なので実質的には10分の1くらいですか。

まだまだあるのですが、本日の範囲で暫定的にまとめておきます。①学問は知恵を入れる袋としては最適ではない、②数学を含む形式知をいくら分析しても無価値だ、③本能と物語化(テンプレ)と超対称性からの離別が脳の作動理解に重要だ、④これらの方向をまとめて「〇〇論」(〇〇学ではない)と名付けると理解してもらいやすい。

14、「うらなり」を読んだ

小林信彦著の「うらなり」を読んだ。この著者について私は何も知らなかったが、ウィキペディアによると結構有名な人らしい。そして「うらなり」とはもちろん、文豪の夏目漱石の代表作の「坊っちゃん」に出てくる人物である。

だから今回の本は、「坊っちゃん」のスピノフ小説ということになる。私はそもそもスピノフと言う分野が好きである。それ自体にサブカルのにおいがする上に、私は本を読んだり事件を聞いたりするたびにしばしば、この時のわき役のその後の人生はどうなっただろうと、そっちの方に興味が行く。

そんな気になる具体例としては、コカチン姫(フビライ・カンの娘)、一房のブドウに出てくる女の先生や「金子みすず」の女学校時代の先生(ともに明治初期のインテリ女性)、ステンカラージンによって川に投げ入れられたペルシャの姫、アレキサンダー大王を負かせた古代インドの藩王などが居る。

スピノフ小説にはパロディ物が多いのだが、今回の本はまじめなスピノフだ。坊っちゃんが松山中学に新任教師として赴任した際の登場人物のうち、うらなりこと古賀が山嵐こと堀田に東京で30年ぶりに再会して、それまでの人生やかつての同僚について語り合うと言ったストーリーである。

瞑想録(その24)

坊っちゃんはおそらく夏目自身の経験に多少の脚色を入れて作り上げた、「若気の至りの懺悔」的な小説であろう。登場人物は校長と教頭(赤シャツ)と図工の吉川(野だいこ)が陰険な第1グループ、坊っちゃんと数学の山嵐と英語のうらなりが生真面目な第2グループ、そして美貌で派手なマドンナである。

今回の本で面白いのは、この登場人物達の中で一番影が薄いうらなりが主人公になっているところだ。そして山嵐が聞き手であり、話の半分は坊っちゃんの思い出になっている。ちなみに坊っちゃんとはあだ名であるが、本名はこの本でも明かされていない。

元本の坊っちゃんの設定では、マドンナはうらなりと結婚することが決まっていたが陰険な赤シャツが横恋慕してうらなりを延岡に飛ばし、これに憤慨した坊っちゃんと山嵐が赤シャツを楼閣で襲って殴り倒し、これがもとで2人とも辞表を書かせられたことになっている。

そして本書によるとうらなりはその後、延岡に2年居た後に愛媛に戻るのではなく姫路に移り、そこで結婚もして凡庸な教師生活をした後定年退職した。元本で気になるところがマドンナのその後であるが、本書ではマドンナはうらなりとも赤シャツとも一緒に大阪の問屋に嫁いだとなっている。

うらなりは姫路で新聞に随筆などを頼まれて連載していたのだが、それを見たマドンナから連絡があって、神戸で一度会った。会ったマドンナは金満家に嫁いだものの家業は傾いていて、指はささくれ立っており昔の派手な面影は全くなくなっていたと言う。

山嵐がうらなりを見つけたのも、その連載がきっかけだ。山嵐は会津出身だがその後ずっと東京暮らしで、やはり今は定年退職している。坊っちゃんの話の設定は日露戦争前後だから明治37年ころだが、彼らが東京で再会したのは昭和9年とある。約30年後である。

うらなりには2人の子供が居た。そのうちの長女が旦那の転勤で東京に居り、孫に会いついでに不慣れな東京に1日かけてやってきたと言う訳だ。淡泊な性格は昔から変わっておらずに、ひたすら山嵐に東京や銀座を引き回された挙句に思い出をポソポソ語ると言う風情である。

こと「元主役」の坊っちゃんに関しては、記述は多いものの基本的に元本にも出てくる一本気で短慮な性格によって引き起こした諸事件の顛末を、うらなりと言うある意味

瞑想録(その24)

傍観者の視点から解説した形になっている。話は「いかにもそれらしい」と言った感じで、ことさらに奇をてらった部分はない。

その意味で意外性はないものの、著者の個性が変に出ているということもなく、安心して読める本である。もっともサブカル流行りの今日にそういう事件性のない書き方には、賛否両論があるだろう。ちなみに本書が出版されたのは2006年である。

この本をきっかけに昔読んだ元本の方を思い出した。夏目の生年から推測すると坊っちゃんの元になる「事件」があったのは、小説より10年ほど前の日清戦争前後ということになる。いずれにしてもお国の大事の時に、田舎の事とは言いながら他方では私利私欲のみの教育者が居たことには驚いた。

「坊っちゃん」はストーリーが非常にわかりやすく、夏目先生などと偉そうなことを言わなくても本宮ヒロ志の漫画であっても全然おかしくない。だがおそらく他方で現在でもこの手のタヌキ野郎が後を絶たないことが、この小説に永遠の価値を与えているのだと思われる。

15、整数論と服のデザイン

以前の記事で現代数学について以下の、「外からの見方」の可能性を指摘した。

数学の定理や特に今注目のラングランズ予想による数学の大統一は、その数学の大基礎が、①「一列の数字と平面」という出来が良すぎるいわば超対称性を基礎にした上でさらにそれに、②「高度の理論を建設できる」という希少な条件を課した時点で、既に組み込まれていたことではないか。

ところでラングランズ予想の焦点の一つが、整数にある。整数は一列である上に「離散等間隔」と言う、さらなる対称性を有している。特に黒川信重先生の著した絶対数学の感想記事において、「整数こそがすべての数学の隠れた根っこであるように見える」ことを指摘した。

現代数学では整数に特別の地位はなくて、「3も π も実数として同等」と言うのが標準的な立場である。だが人々は昔から、整数に独特の神秘性は感じていたようだ。著名な数学者の一人であるクロネッカーは、「整数は神が作り給ったものであり、あとの数字は人が作ったものだ」と言っていた。

瞑想録(その24)

私自身も神秘思想は好きではあるが、整数に関してはもう少し現実的な見方をしている。冒頭にも記した「平面と数字と言う超対称性」を認めるならば整数はさらに対称性が高まっていて、言わば「超超対称性」とでも言うべき事態になっているのだ。

つまりそれ以前の「低い対称性」の段階にはなかった新たな「整然性」により新しい「高次の対称性定理群」が出現するのは、その具体的内容は置くとしてもこれはもう当然だろう。当然ながら対称性が1段階上がる毎に、一方で調子は良くなって同時に現実からは遠ざかる。

ラングランズ予想で統一される対象とは何か。関数論やリーマン面で言えばその大元は多項式である。多項式とはつまり、①指数対数関数や三角関数その他の「不純物」は入っていない、②整数次多項式であって小数次元は出てこない、と言うものだ。何気なくだが実は極めて整数に拘っている。

保形形式やモジュライの場合は周期性だが、周期だって整数回しかない。さらに量子論でもその基礎となるリー群の次数はすべて整数だ。これらの見通しから見えるように、ラングランズ予想とは多分に整数予想である。一言で言うと「話を整数に限る」と言うことは実は昔から結構暗黙にやられていて、単にそっちの方に目が行っていなかっただけの話なのだ。

ところで数の発達史から言えば整数は実は真っ先にあった。物を数えると言う行為も整数から始まり、それが分数や少数や無理数に発展していった。こういった歴史順序に沿うならば、整数は無理数が出た段階でも依然として特権階級である方が実は自然ではないか。

蛇足だがここで逆に「始めに1があった」のではなくて、「始めに無限があった」と考えてみよう。この無限を開いて見せると実数列になり、この中からさらに特定に雫として垂れた無限小の粒が整数だと見てみよう。そうすると整数だからこそ出てくる定理や統一性が、ない方が不思議に見えてくる。

ここで話は変わるが図案、特に和服の図柄を考えてみる。図柄には大きく分けて、文様と実写がある。文様の場合そのエッセンスは対称と繰り返しである。つまりそこには情報圧縮があるのであり、その本質はデジタルであり数学である。

瞑想録(その24)

他方で実写の場合、鶴と亀の絵だったり松竹梅だったり、あるいは不定形な雲だったりするが、そこに繰り返しや情報圧縮はない。その代りに多くの場合に、物語と画像認識がある。こちらは多分にアナログであって数学が入る可能性はない。

加えて和服のデザインの場合は青海波のような文様と山水画のような実写が、混じることによりその面白みを出している場合も多い。つまり数学はそれがたとえラングランズ予想ほどに高度な物であっても、図案の内の文様の部分しか見ることができないのだ。整数に話を限ればなおさらだ。

これは価値観にも寄るが、数学や特に整数は対称性が高くて多くの定理が見出されても、実は同時に広い世界のほとんどの部分を見ようとしないうちに実際に見えようがない。言わば大変にもったいない自己否定であり、特に知恵と美の否定なのである。

仮に文様に限定しても、多少間引くとか何かをちょっと付加するとか、整列よりも変化やはみだしの部分の方が本当は面白いのだ。つまり数学を少し外れたところにこそ和の美と味わいがあるのだが、数学の内に居る限りこの宇宙から飛び出せないように、抜け出るすべがない。

フレンケル先生はこれからの数学の指導原理を、「対称性と双対性である」と言った。そして双対性の方だったら今見たように実写の方にも関与できる可能性がある。例えば「鶴と亀」あるいは「竜と虎」、これらは双対である。松竹梅に至っては3回双対と言える。

つまり双対をキーワードにすると、息苦しい数学の世界から飛躍できるかもしれない。民俗学者の中沢新一は柳田国男を引き継いで、「自然と人間は対称であるべきだ」と言った。だがこれは、「自然と人間は双対であるべきだ」の方が的確だろう。

また三島由紀夫の「憂国」における主張がより深堀すると究極に、「死とエロスの双対性」であることは、以前に指摘したとおりである。この辺を足掛かりにして数学的思考をアナログにまで展開することは、あるいは可能かもしれない。

数学が「当たり前」への情報限定であるとするならば、数学と言う学問は「その情報限定に起因する副作用を調べるマニアックな学問だ」とも言えるのではないか。現代の数学はいくら理論を高めようが所詮は内向的で、典型的なガラパゴス分野だ。

16、キムチ自転車(ランダム短編②)

広志は今東京都中央区役所の食堂で、日替わりランチを食べている。広志の趣味は美術館や博物館回りで、特に入場料の安いところを数か所回ってそのままローカル食堂に入るのがお気に入りのコースである。

この日も京橋の、LIXILギャラリーや旭硝子AGCスタジオやポーラミュージアムそれにキャノンギャラリー銀座を回って、今は中央区役所の11階と言う訳だ。ちなみにこれらの展示場はいずれもメセナなので「売らんかな」の商品展示ではなく純粹の美術展示で、しかも入場料無料だ。

食事を終わって、区役所の1階ロビーに降りてきた。どの区役所でも1階には、その区で近々行われるイベントのチラシが置いてある。これが次にどこに行くかの重要なヒントになるのだ。つまり区役所とはその意味で、広志にとっては一石二鳥である。

そんな何気なく手に取ったパンフに、「キムチ自転車」と題したものがあつた。題名からでは良く分からないイベントだが、区内の警察博物館で啓もう活動として一定期間やっているイベントで、クリアーすると景品もあると言う。パンフの下方にはスマホとかウォークマンとかハンバーグセットの画像が並んでいた。

今までにはなかった新鮮なイベントであり、広志は次の週にそのイベントに参加するために警察博物館を訪れた。最上階の5階のイベントコーナーで、そのイベントはあるらしい。実際に5階に行ってみると、普通の自転車とママチャリが数台ずつ固定されて並んでいた。

係り員の誘導で広志は自転車に乗って、その場でこぎ始めた。そしてしばらくすると、ビートの効いた音楽がかかってきた。広志の好きなタイプの音楽だ。乗ってこいで居ると、目の前にウォークマンが現れた。広志はいつもの習慣で、ハンドルを持つ片手を離すとそのウォークマンを取ろうとした。

その途端である。右前方からウィーンとアームが回ってきて、広志の右眼にキムチを思いっきり塗り付けた。いやあ痛いなのなんのって、サロメチール(ハッカ)を塗りつけられたみたいだ。どうやら片手運転をした罰らしい。広志はそのキムチを食いながら涙が止まらなかった。

更にこいでいると今度はバックが、ゲームのダンジョンの効果音になった。広志の好きな武闘ものだ。そこに今度はスマホが現れた。広志は再度条件反射で、片手を放し

瞑想録(その24)

てスマホを握った。すると今度は左前方からウィーンとアームが回ってきて、広志の左眼にキムチを塗り付けた。

ああいかんいかん、そう言えば片手運転は事故の元だよな。そう反省しつつこぎ続けると係員が、「あともう一息です」と言ってバーガーセットを差し出した。腹が減っていた広志は思わず両手でそのバーガーセットを掴んだ瞬間に、今度は両側からアームがやってきて広志の両眼にキムチを思いっきり塗りたくった。

こうして散々痛い目に遭って、そのイベントは終わった。「これだけしくじったのだから失格だろうな」と思いながら自転車を降りると、なんと「クリヤーです」と係員が言う。どうも参加することに意義があるイベントらしい。たしかにもう片手運転をしない習慣がついた。

「さてクリヤーの景品は新型スマホかそれともバーガー数食分かな」などと期待しながら待っていると、広志がもらえた景品はパトカーの写真の缶バッジ1個だった。期待が大きいと失望も大きい。広志は思わず力が抜けて再度パンフを見ると、商品がスマホだとはどこにも書いていない。

単に「そう言う釣りがゲームでは出てきますよ」と言う予告だったのだ。まあパトカーの缶バッジも非売品と言う意味では価値があるだろうが、こんなのを作るのなんか原価は10円程度で、オークションに出してもせいぜい数十円だろう。送料の方がよほど高くなってしまう。

不思議に納得して帰ろうとすると隣でママチャリチャレンジをやっていたおばさんが、「ふざけないで下さいよ、こちらは子供を乗せているのですよ」といきり立っている。「歩行者優先の歩道で急ぎの余り歩行者にぶつかった」と言う状況らしい。

さすがにそのおばさんはその時点で、イベントは強制終了だった。やれば全員合格のゲームではなく、悪質なケースは退場もあり得るゲームだったのだ。まあ当然だな、広志はそう思いながらさっきもらった缶バッジをそのおばさんの3歳くらいの子供に呉れてやった。子供は素直に喜んでいた。

最近は悪質な自転車事故が多くて警察も取り締まりを強化しているとは聞いていたものの、「キムチ自転車」と言うこのいかにも訳の分からないネーミングが、本日やっと理解できた。おばさんはとにかく広志は今後、マナーを心得た自転車運転手になることであろう。

* * * * *

前回のランダム短編の趣旨は、「記号と言う意味で数字の要素も持つ言語が、およそ互いに無関係であってもつながることは可能か」と言う素朴な問いが設定で、その結果としては「直ちには繋がらなくても5行も間が入ればまずつながる」でした。

本日の思考実験の目的は、「およそ繋がらない言葉を直に足し算して、そこにたんなる足し算以上の相乗効果を盛り込むことができるか」と言う問題設定です。キムチと自転車、これらの言葉は通常感覚では直ちには繋がりません。

「キムチを運搬した自転車」とか「自転車型に並べたキムチ」とか「キムチと言う名前の人の自転車」と言う程度では、十分な相乗効果があったとは言えません。夢を使うとかタイムマシンを使うとかのトリックも、良く見るものの安直過ぎです。

本日の結果はどうだったでしょうか。新しい概念と世界が展開されていると認められるでしょうか。不合格でもそれは私の限界であって言葉の限界ではないと信じています。

17、蓋然推理術

先日「今までの記事のエッセンス」と題して、最近の約30記事のエッセンスをそれぞれ3行程度にまとめた。当ブログは各記事こそ独立であるのだが全体として「ある方向」を目指していて、その方向を具体的に見極めたいためであった。

他方で以前からこのブログのキーワードは、「素朴な疑問と意外な気づき」であると主張してきた。このキーワードをよく見るとこれは、①素朴な疑問が気になるフェーズと、②それを精錬して意外な気づきに至るフェーズの、大きく2つの気づきの山から成っている。

そこで本日は先日にまとめた最近の記事のエッセンスを、この「2フェーズ」の観点から整理しなおすことにする。その究極目的はやはり、このブログ全体を通した「大主張」を見極めるためである。

・会話に見る理解手順: ①育ちの異なる全く初対面の人がお互いに意思疎通できてしまうのは不思議だ、②同じような本能と似たような環境に育っていると言う共通原因に依っている。

瞑想録(その24)

・地味ハロウィン:①素人さんの物まね瞬間芸なのだがどうして笑えるのか、②写真の方が言葉よりも暗黙知に直接訴える訴求力が強いからだ。

・暗黙知理解の構造:①言葉と言う形式知による意思疎通は近似の程度が低すぎるはずなのになぜ通じてしまうのか、②完全理解でなくても大抵の用件は済んでしまうからだ。

・昭和8年の少年倶楽部:①地理や歴史と言った暗記科目は膨大な数のバラバラなお題目なのにどうして記憶できるのか、②実は物語化して縦横の糸を通して記憶している。

・意味数学:①論理学は学問なのにどうして応用先が狭いのか、②人の思考のほとんどは形式論理ではなく付加価値を伴いかつ完璧を前提としない知恵の意味論理で行われているからだ。

・笑える間違いの構造分析:①間違いにも笑えるものとそうでないものがあるのはなぜか、②間違いの背景真理が推測できた時点で笑いと言う優越行為に至る。

・絵画か論理か:①絵画と論理は正反対なのにどうやって切り替えて使っているのか、②どんな時でも人は絵画と論理を適当に混ぜ込んで思考判断をしている。

・数学と意味:①数学には日常の意味は入り得ないのか、②論理と異なり日常の意味は入り得ないので数学は現実離れしていて応用先が少ない。

・数学の大統一について:①代数と幾何と解析と整数論と言ったまるで異なる分野が統一できるとは夢みたいだ、②数字と平面と言う超対称性がそもそもの出発点である上に「高い論理が築ける」という厳しい要請をクリアできるところに既に共通要因があるだけのことだ。

・数学と工学と検索:①数学は高度だが役に立たず他方で工学は物が作れるが地味だという矛盾は良いとこ取りができない運命なのか、②学問であることを辞めれば絶対性は保証されないものの知恵を入れ込めて面白くなる。

瞑想録(その24)

・読書に関する素朴な疑問:①文章はたかが形式知のわりに理解に時間と労力がかかってツールとしては貧しくないか、②貧しいがそれ以外に順序や論理を表現するツールが現代人にはない。

・ハザール王国:①学問は根拠こそあるが知りたいところを教えてくれていない、②それこそが学問の限界であり未来人間はこんな手続きは使っていないだろう。

・形式知と暗黙知:①本質の暗黙知を形式知で表現したとたんに歪んで貧しい情報になってしまう、②その通りで残念だがその貧しい形式知から情報量の高い暗黙知を掘り出せる人が地アタマの良い人だ。

・トイレの順番待ち:①女の子を先に入れてやるのは親切か、②女の子を後に入れてやるケースを補助的に提示すればこれが越権行為であると直ちにわかるがこういう解決法が数学の本来の存在価値だ。

・古代人の心:①古代人はみんな野蛮で愚かではないのか、②自然から直接に感知できる古代人の方が科学手続きに甘んじている現代人よりもはるかに知恵がある。

・夢と解釈シリーズ:①夢解釈は忌むべき非科学の典型ではないか、②むしろ無意識の本当が覗いているが残念なことに決して常にではない。

・戦史学事始め:①勝ち負けしかないのだからもっと図式的理解をしたいのだが、②気持ちはわかるが現実には図式では単純すぎて誤解を呼ぶケースも多い。

・物語化:①事物に慣れてくると簡単に答えられるのはなぜか、②脳の本能の外堀に起承転結のある物語テンプレートが形成されてこれが半ば形式的に答えているからだ。

・気づきの地平:①素朴な疑問と意外な気づきの構造とは、②素朴な疑問は全体観的な過不足感と不自然感で起こり意外な気づきはその精査の果てに出てくる結論だ。

さて、最後の「気づきの地平」の分析は本日の集約全体の結論にもなっています。ポイントは第1に全体観による漠然とした過不足感であり、第2にそれを脳内の試行錯誤で精査したエッセンスとしての一言です。どちらも気づきが広くて深い程地アタマが良いと言えます。

これらのプロセスに共通するのは、①理屈のない閃きと知恵であり、②決して全体を網羅しない(絶対再現性がない)と言う意味で蓋然的なことです。もし絶対再現性があるならそれは形式論理と同様の単なる言い換えであり、知恵やひらめきとは無関係です。

そこでこれらの気づきのプロセスを、特に学問でないことを明示するために、「蓋然推理術」と呼ぶことにします。次の目標はこの蓋然推理術に何らかのメタ法則つまり演算が存在するかどうかです。

18、ムハンマドの居ない「聖☆おにいさん」

中村ヒカル先生の有名な漫画の「聖☆おにいさん」、主役は仏陀とイエスと言う世界宗教の2代開祖である。かつ2人は親友同士だと言う設定だ。連載も10巻を超えて都合1000万部以上を売り上げ、キリスト教国も含むいくつかの国語に訳され、映画にもなった。

ジャンルの的には「ユーモア」だろうか、「悟っては居るものの」と言うか「悟っているが故に」、世知辛い世の中について行けずに、外人にありがちな頓珍漢を繰り返している。憎めない変人と言うスタンスで、「それぞれの宗教的エピソードを交えながらボケ合っている」というスタイルだ。

宗教と言う一步間違うと非難されそうなネタをうまく料理して、温かい笑いにもっていく作者の技量は驚嘆に値する。もっともこの手のサブカル物に全く地雷が無いかと言えば、実際はむしろ逆だ。例えばヘタリアは、日本と微妙な関係の国民性の表現に苦労していることだろう。

ところでその「聖☆おにいさん」に世界3大宗教の開祖のうちブッダとイエスは出てくるが、3人目のムハンマド(モハメット)は出てこない。ここは学問ではないので「全員出すべきだ」とまではいわないが、素朴になぜ出てこないのだろう。

この手の議論はすでにネット上にいくつかあって、検索もできる。推定は大きく2つあって、①ムハンマドやイスラムが日本でおなじみでないから登場させても面白くならない、②イスラム教には極端で狂信的な一派があるので変に関わらないようにしている、の2つである。

瞑想録(その24)

おそらくどっちの理由も当たっているのであろう。そこで不思議になるのが、「なぜイエスは良く知られていてムハンマドは余り知られていないのか」だ。日本人のキリスト教人口は1%に満たない。マイナーを乗り越えてほとんど不存在だ。事実上不存在と言うことでは、イスラムより別段優位にない。

イエスの漫画上の事跡としては、聖痕、いばらの冠、天使たち、クリスマス、山上の垂訓等の名言(右の頬を打たれたら左の頬を出せとか)が用いられている。これらはまあ、キリスト教徒関係のない日本人でも結構知っているエピソードだ。

これに対してムハンマドは、これらに匹敵するようなエピソードが知られていない。イエスの公生涯は3年半に過ぎず他方ムハンマドは50年も預言者をやっていたからエピソードはそれなりにあるのだろうが、日本では知られていないのだ。

だから考えようによつてはイスラムも、立役者のムハンマドを良い意味で漫画に出してもらった方が、伝道に資すると素朴に思う。仮にエピソードに出すとしたら、アラファトの丘の戦いとかラマダンとかハザーンとか天使ジブリールとか、まあその辺になるのだろうか。

そう書いている私も、イスラムには詳しくない。私自身は神道(アニミズム)だ。だからキリスト教だって上辺のエピソードをいくつか知っているだけで、信仰者になった時の嬉しさがリアルに追体験できるわけではない。その意味ではイスラムと変わらない。

私にとってキリスト教は、はっきり言うと「薄っぺらな創作宗教」だ。劇の著作者は使徒パウロである。人を「お前には罪がある罪がある・・・」などといわれのないことで散々脅かした上で、「はい、イエス様を信じて救われました」などと言うのは、ほとんどオレオレ詐欺ではないか。

私の神道が好きなのはその人造的イデオロギーのなさであり、自然との一体感である。私は土から生まれていつか土に帰る。間違っても天になぞ行かない。そしてその土からはやがて芽が出て花が咲き、四季が移ろう。これは目くるめく世界だ。

一般に仏教のご利益は悟りであり、キリスト教は救いだと言われている。ではイスラムは何だろうか。思うにそれは「安らぎ」ではないか。イスラムは、金貸しを禁止して喜捨を勧める等貧しい人に温かく、人々も概して温和で人懐っこく気が長いと言う。

瞑想録(その24)

イスラムはユダヤ教やキリスト教より後で出来た分だけ、前者の失敗例を反面教師として学習している。特別な聖職者も居らず、「全信者が伝道者」である。でもなぜか、イスラムは女性だけに特別な服や被り物を強制し、意味のない食の禁忌が多く、酒類も一切許さない。

つまり今列挙したような変に古いしきたりが紛れ込んでおり、管理システムとしてはともかく信仰内容は時代の進化に逆行しているようにも見える。イスラムから「自由・平等・博愛」が出てくるとか、これらと馴染むようになるとはおよそ思えない。

それにもかかわらず、つまり一見の構造的欠陥を抱えながらも、世界宗教になった。あと数十年もするとキリスト教の人口を抜いて、信者数は世界1になると言う。しかも特に初期の西アジアのテュルク系民衆の改宗では、アニミズムはもちろん進化系のネストリアンやゾロアスターやマニ教を辞めさせてまで、改宗させている。

もちろんそこにはムハンマドがそもそも商人であっただけあって、シルクロードの商人の心をくすぐるような、コミュニティ同化に対する優遇策も取られた。だが単に見かけの利益だけだったら人々は面従腹背するだけで、ジハードをするほど熱心にはならなかっただろう。

私はこの秘密の答えはむしろ、今指摘した「後進性」にあるのではないかと思うようになった。つまりキリスト教がイデオロギーに走りすぎて一種冷たい金属質のものになったのに対して、イスラムは一神教の論理の部分と土着の人間らしい「暖かい」部分が配合良く混じり合っていて、それが信徒に安らぎを与えるのではないかという見方だ。

こういう人間臭いキャラでムハンマドを「聖☆おにいさん」に登場させるのは、不可能ではないと思う。

19、「メディア文化論」を読んだ

題記の「メディア文化論」(ナカニシヤ出版)を、図書館で借りて読んだ。そもそもこの本を借りた動機は、私のような昭和のおじさんでもと言うか、昭和のおじさんだからこそ、今の若者のサブカル精神が実は「昭和の呪縛をぶち壊して生まれ変わるウルトラCだ」と確信しているからだ。

瞑想録(その24)

そして今の若者のマインドを形成している大きなツールがSNSに代表されるような新メディアであることから、メディアの現状を通して若者のマインドのリアルな流れと、しかももし叶うならばメディアの近未来の予言を得て先回りできたらと考えたわけである。

だが借りてみて分かったことはこの本はむしろ逆であって、過去のメディアの変遷を整理して講釈する、典型的な大学生の教科書だということだ。多くの若手の先生の分担執筆になっているし、各章末には討論課題まで挙げられている。

コミュニケーション学部とか文化情報学部とかの教科書なのだろう。図書館から本を借りるときに、ヒントになるのは題名と数行の解説のみであるから、こう言うことも起こり得る。嫌なら読まずに返せば良いだけの話なのだが、この本に学問の悪しき典型を見たので、ここにあえて取り上げる。

この本は第1部で、メディアを広く「媒介物」と定義した上で、その広さを示している。だからラジオやテレビだけでなく、貨幣も地図もすべてがメディアなのだ。こういう議論はあるだろうが、多分に学問覇権主義にも見える。でもまあそれはここでは良いとしよう。広い分だけ薄くなっている方が問題だ。

その中に「リア充とオタクの終焉」と言う節があって、これは関心のある分野なので読んでみた。だが要するに「厳密なリア充とか純粋なオタクとかは存在しない」と言う、学問得意の「突き詰めると割り切れないのが本当だ」をやっているだけだった。

それよりもこの「媒介物すべて」と言う定義で、私が連想したのは「縁結び」である。ちょうど最近正月だったが、ほとんどの寺社のご利益は「縁結び」である。縁の内容は人によって大学合格だったり就職だったり良縁だったりさらには人生目標であったりするが、これらはすべて「縁」であると括れる。

だからご利益を縁結びにしておけば、「何でも叶いますよ」と万能性を謳っていることと同義語だ。これと同様に「全ての学問はメディアなのだからいわば全包括学部だ」と、この教科書は宣言している。ただし寺社はありがたいが、この教科書には愚かな傲慢を感じる。

第2章では世の中の典型的なメディアとその対象について、具体的態様を語っている。具体的な対象はパワースポット、地域、パブリックスピーチ、精神疾患、障害者などだ。特にメディアを標榜するところは同時に「多文化共生」も謳っているから、最後の2者がことさらにある。

このうちのパワースポットに興味があったので読んでみた。内容は過去のパワースポットをニューエージ型、スピリチュアル型、デトックス型と3分類した上で、この順に「進化」してきたと評するものであった。こう分類して何かご利益でもあるのだろうか？論文の本数のノルマ果たし位にはなるだろうが。

第3章では「映像表象から見るメディア文化」と題して、ゲーム、漫画、お笑いを論じた上で、最後の章で「時をかける少女」を例にリメイクの重要性を訴えている。やっとこの辺で「少し使えるところに入ってきたかな」と言う感じだ。もっともその内容は針小棒大な感じがするが。

ゲームではスタートレック、漫画では少年ジャンプと鋼の錬金術師、お笑いではチャップリンを例にとって、その「本質」を解き明かしている。もちろんこれらの作品等は各分野の代表作であるが、どうも「この著者たちはこれだけしか知らないのではないか」と疑わせるところがあった。

それにサブカルメディアの現在進行形のテーマは斜に構えてエラソーに解説するよりも、少しでも良いから自分でプレイしてみるあるいは創作してみるほうが、なんぼも面白い。かつ実践こそが実際的な未来創造になるのに、この著者たちはその肝心のところが分かっていないとしか思えない。

ヒッピーから始まって涸れることのない渴望で多くの革新的製品や概念を世に出したスティーブ・ジョブズと、流行るまではむちゃくちゃにこき下ろして流行り始めたら手のひらを返して称賛する二流の評論家と、あなた方はどっちになりたいのか。

まあ最後の第16章の、「時をかける少女」や「伊豆の踊子」を主要例としたリメイクの重要性とそれが時代を映す鏡であると言う「リメイク肯定論」は、学者にしては上出来だと評価した。そしてこの章でこの本は終了である。「入口に着いたところで終わり」と言う訳だ。学問はどの分野でもそうだが。

本日は少し辛口だったが、大学と言うところが学問的手法を身に着ける場と定義されている以上、彼らの態度を批判するのはある意味お門違いである。嫌ならば単に行かなければ良いだけのことだ。大学は万能の場所だと思ったら大間違いだ。

もっとも私は20歳前後と言う頭の新鮮な時期に、「はれのひ」ではないけれども、「先払いでも払ってしまったら戻ってこない」とか、「ちょっと世話になった形を作られると後

瞑想録(その24)

で数倍も恩を着せられる」と言った、もっと世の中の役に立つ実践的な歩き方をこそ習いたかったね。

20、第一印象と暗黙知

私はもう2年以上前から新聞を取っていない。基本的にニュースは「ヤフーヘッドライン」で済ませているし、実際に済んでいる。ヤフーやネットのニュースポータルの場合1記事1行で端的に、約15字以内で見出しを書く。

先日も「西部邁死去、自殺か」と言う見出しを見て、「ふーん」と思った。そして振り返ってみると大抵の記事の最初の印象が「ふーん」である。まあ分析する前の理屈なしの第1印象と言ったところか。この後に「そういう人が居たなあ」とか「何か行き詰ったのかな」等の理屈や感想が従う。

この「ふーん」は特定の意味や情報がある訳ではなく、強いて言えば「第1印象として自分の脳内の特定範囲に格納されました」と言う通告だ。その意味で真の暗黙知である。そしてこれこそが真の暗黙知であって、暗黙知であるからこそこれ以上説明のしようがない。

あとに引き続く「そういう人が居たなあ」とか「何か行き詰ったのかな」等は、ここですでに感想や理屈が入っていてほとんど言葉にできている。つまりほとんど形式知なのだ。言葉による表現は高々このニュースのほんの一面であり、全部合わせても決して包括していない。

その証拠に情報が大きく減損していて、これらだけを並べても元のヘッドラインを復活できない。形式知は暗黙知のある一面を明確に固定する働きをするものの、実際はせいぜい暗黙知を後追いで追認するだけである。

ところで以上の一連の脳内作用の時系列解説によって私は何を知りたいのかと言うと、それは言葉にならない素朴な暗黙知のありようである。それはどんな構造をしていて、脳のどの辺に定着し、暗黙知全体はどういう構造をしているのか、そう言った内的空間の構成と形状である。

ところがこれが難しい。先のニュース全体と「西部邁」単体が形成する暗黙知が、「互いに近場にあるかあるいは似ているか」と問うと、そう言う気もしない。同様にこのニュース全体と「自殺」、自殺はこのニュースを構成する重要なキーワードであるが、「自殺一般」の暗黙知と近い気もしない。

たまたま同じ日に別の人のブログで、「自分の主治医が62歳で突然死した」と言う記事も読んだ。この記事の特にこの部分を読んだ時の感想もまず「ふーん」だった。では同じ「ふーん」で同じ死亡記事だからこれらが収納された脳内位置は近いかというと、そんな気もしない。

振り返ってみるとどんなニュースも第一印象はたいてい「ふーん」なのだが、常にそうだという訳でもない。「消費増税決定」と聞くと「ええ！ そうなの？」が最初の反応だ。自分事であって通り過ぎられないからだろう。と言うことは西部さんの死亡など所詮は他人事であって、自分には関係ないということだ。

大抵の記事が「ふーん」だということは大抵の記事が、「読んで損した」とは思わないものの、西部さんや62歳の主治医には失礼かもしれないが、自分事でなくて自分の安全が脅かされないと言う脳の反応なのだ。暗黙知が本能に直結している以上は、安全に深くかかわっている。

だから事件一般としてははるかに小さいが、「爪がささくれた」感触は「あれ？」なのだ。そして引かなかった部分をしげしげと見つめて、放置するなり爪切りで整えるなり、納得するまで対策を取る。その間は一連の暗黙知が次々に作動していく。この作動原理と軌道空間を知りたい。

先ほどは玄関近くに人の気配がした。その時の私の反応は「警戒！」だった。「ふーん」ではない。だれが何の用であるかが分かるまでは最悪強盗かもしれないからだ。実はそれが嫁様だと分かって初めて安どして終了するが、ここでも一連の暗黙知が次々と働いていく。

ここで仮にニュースが「西部警察死去」だったら、降りかかる危険はないものの「ふーん」でなくて「あれ？」だろう。第1印象だから分析は全くしていないはずなのに、過去に脳内に蓄積されたテンプレが素朴に「組織は死なないだろう」とささやいている。

この場合引き続く動作は、「読み違いかもしれない」と仮定してもう一度そのヘッドラインを読むことだ。これに至る一連の動作が、暗黙知と形式知のどちらに近くて脳内のどこかにあるのかは不明なのだが、「正しく読むと実は自分事だった」と言う可能性がまだ解消していないのだ。

「はれのひ」のニュース(着物レンタル業者が成人式の日に逃亡した)を聞いた時の反応は、「ええ！ ありかよ？」だった。自分事では全くないのだが、こういう事態はいまだかつて予想していなかったからだ。読み間違いでもない。

さっきはツイッターを繰っていたら吉田類が出てきた。その時の反応は「へえ！」だった。何か面白い事がありそうな予感がしたのだ。そして実際に黙々と読む行為に移り、読んだらやっぱり素朴に面白かった。これらの行為の主要部も多分に習慣的に、暗黙知側だけでなされたように思う。

暗黙知は言葉にできないので分析が難しいが、こうして行為を通して回りから攻めていくと、もう少しそのありようが見えてくるかもしれない。弘法大師が開いた密教も、何とかして暗黙知に至ろうとする格闘である。

21、「不謹慎な経済学」を読んだ

田中秀臣著の「不謹慎な経済学」を読んだ。限られた人生の中であえてこの本を読書に選んだ理由は、「まじめな学問」におよそ何も期待していない私にとって、この本の著者が経済学者として傍流であるだけでなくサブカルの専門家でもあるところが、私と気が合うと思ったからである。

まじめな経済学の得意な話、公定歩合とかインフレ率とか雇用統計とか株価指数とか、そう言う話は一切出てこない。そうかと言ってリチャード・クーや浜矩子のように、外れるだけでつまらない訳でもない。内容を一言で言うと「常識のウソ」の経済版みたいなものだ。

株で一儲けしたい人には役に立たないかもしれないが、まじめに笑いたい人や意外な気付きに感嘆したい人には向いているだろう。教訓を一言で言えば、「数字にならないアナログな経済環境こそが長期的には経済を大きく決めている」と言うことか。経営者には得るところがあるかもしれない。

著者は明言こそしていないがもう一つの主張は、「経済とは楕円型である」と言うことだ。「因果関係」と言うが、経済には一つの要因で決まる事象は余りない。むしろ多くの要因の大小関係や相互作用をどう見るかで学派が異なってくる。しかもその大小関係の決定は、多分に好き嫌いに依っている。

面白い主張を端的に要約すると、以下のものがある。

瞑想録(その24)

- ・官僚の天下りは正しい: 優秀な人材を生涯収入で釣る実践的な仕組み
 - ・ニートも派遣も役人の利権を産むだけ: すぐに役立たずの外郭ができる
 - ・ボランティア義務化は格差拡大: ボランティアも余裕があるからできる
 - ・ブロガーはラーメン屋の行列だ: 自己主張も暇があるからできること
 - ・五輪景気よりも怖いのは不景気: 必ず後で反動の不景気がやって来る
 - ・デフレチャンス論は危ない: 「デフレは不良企業を淘汰する」は片手落ち
 - ・「失われた10年」は回避できた: 無能な福井総裁を更迭しなさい
 - ・米国経済は崩壊する: 膨大な債務の上で空威張りしているだけ
 - ・最低賃金引き上げは雇用悪化: 仕事もなくなることになる
 - ・「経済学が弱肉強食」は間違い: 戦争や略奪よりもはるかに平和で平等だ
 - ・経済発展はテロを助長する: テロリストの多くは裕福な家庭出身だ
 - ・二二六が日本を終わらせた: 高橋是清の適正インフレ政策の強制終了
 - ・経済安定はナショナリズムを終わらせる: 仮想敵が不要になる
 - ・社会保障はテロリストのおかげ: 貧民の出ない再配分を志向する
- 等である。

全体として経済学と言うよりは精神論に近く見えるが、そう言う精神的な物を失った、かつての武士道の国の日本。いわば鹿鳴館時代の西洋の真似から未だに脱しきれない日本の経済マインドが、経済ご本家の欧米よりはるかに低級で手おくれの経済政策しかできていなくて、外国の笑いものになっていると言う訳だ。

断っておくがこの本が出版されたのは2008年なので、アベノミクスにも黒田総裁の異次元の緩和にも触れていない。その意味で少し古いところはある。だが今ご活躍の自称経済学者の予言の賞味期限がせいぜい半年であることを考えると、これらの精神論の価値は十分に長いと言えるのではないか。

この本は正統の経済学をバカにしているところがあり、これはサブカル精神だ。単に逆らうだけならヒッピーと同じでいずれは流産してしまう運命なのだが、この本のサブカルはむしろオタクに近い感じがする。新形式の知恵があるのだ。であるならば流産せずに、クールジャパンに至ることもあり得る。

この本を読んでの私の感想は、まずこの著者はかなり地アタマが良い。「1を聞いて10を知る」人物だ。気付きのポイントが奇抜であると同時に、言われてみると正鵠を得ている。第2にユーモアの精神に富んでいることだ。人を食ったと言えばそう言う味もあるが、「食われる方が愚かだ」とも言える。

瞑想録(その24)

この本で初めて知った知識に、「デフレ歓迎論」の存在がある。「デフレになると体力のない経済的に不良な会社が、ことさらに整理しなくても自動的に淘汰されていく。これは一時の苦しみは伴うものの将来の経済健全化にとっては好ましいシステムだ」と言う主張である。

この主張に対しこの著者は、そう言う「一見正しく聞こえること」が実は一番危険であり、荒唐無稽な理屈の方がまだ罪が軽いと主張している。一面で真であることは頭の悪い人には、あたかもそれが全部であるかに思えてしまう。これはほとんど詐欺の類だと言う訳だ。

この例でも分かるようにこの「経済書」の主張と議論の手順は狭い意味での経済学を超えて、また学問の不自由なしがらみも超えて、遥かに汎用性と知恵がある。これは「今の若い人たちのサブカルこそが近未来の新大陸のメインストリームになる」と言う私予測の、まさに最初の例だ。

さらに列挙した例示でも見えるように、本書の内容は経済版の「素朴な疑問と意外な気づき」になっていて、私のブログ記事とも相性が良い。数値のみの狭い経済学に忠実な人々はおそらく、「クリスマス・キャロル」に出てくるスクルージと同類だ。

「人間性をなくす拝金がいけない」などと言うキリスト教臭い説教はしないが、金が手段でなく目的になっているとは、おそらくつまらない人生だろう。

22、今までの記事のエッセンス(その2)

引き続き暗黙知の作用機序の解明を目的として、最近の記事を一言でまとめていく。

・恐怖の判官贔屓：日本には源義経や赤穂浪士に、彼らの思いや信念とは無関係に同情し賛同する「判官贔屓」と言う理不尽な情緒があり、これは韓国の国民情緒法ほど強固であって国政すら左右する。

・4年目のアベノミクス：アベノミクスは「日本だけが頑張れば」と言う調子をこいた前提があるが、それでもなおこの政策が現実的にはベストであるほどに、日本経済は老人化している。

瞑想録(その24)

・法人の一体性: 東芝問題で「あの会社がかつて日本で最初に洗濯機やテレビを作ってくれた」と応援する声があるが、そのころの社員はもう全員定年退職していて「同じ会社」であるかは疑問だ。

・文明批判の批判: 私が科学技術手続きを批判すると、「その成果であるブログを使つての批判は矛盾だ」との声がかかるが、現代消費文明の本質は使い捨てではないか。

・東芝崩壊の真犯人: 東芝が道を外した最初の犯人は傍流出身でおよそ下馬評になかった西室泰三さんだが、この人の一番強い運は自分が詰問される直前にちゃっかり死んだことである。

・真実のありか: 本当に革新的な真実はしばしばその発見者の死後に始めて評価される。今評価されたい人は頑張って大学で単位を取って会社でも成果を上げて偉くなることでも目指しなさい。その程度の器なのだから。

・意味理解の境目: 意味が理解できるかできないかの境目辺りは、アナログ集合における境目では常にそうだが、意味ができる場合と出来ない場合の条件の厳しさの順序が微妙に逆転していることがある。

・文明と未開の分岐点: 未開民族は山ほどあるが文明の契機は単一であって、それはおそらく「地球は丸くてしかも動いている」と言う逆転の発想であり、かつこの「逆転の発想が儲かる」と気づいたことにある。

・歴史となり切り: 歴史は事実史とは異なっていて、要点のみを取捨選択して起承転結宜しく全体を物語化して整理したところにある。物語化になりにくい事実史はなかなか頭に入らない。

・もったいないと言うこと: いつの時代でも技術革新の不連続性により、正義か否かは別にして古い成果や産物は整理され淘汰されていく。それではその淘汰された文化を作った努力には、どういう意味があったのだろうか。

・絵画と夢が教える本当: ピカソや同時代のキュービズムの人たちの絵画は一見不思議で不自然に見えるが、これらが感情の画像化であることを想起すればむしろこちらの方が自然であり、私たちの「普段の眼」の方が歪んでいる。

瞑想録(その24)

・論理より自然性: 論理的と言うと聡明で絶対的真実であるように見えるが、実際は「論理の真実」は一面的でありかつその一面を強調しているだけである。こう議論の場合には、相手の土俵に乗らないのが一番だ。

・払いたくない人件費: 貴重な若い時間を泣く泣くドブに捨ててその対価として生活費を稼いでいると、最も支払いたくない金はピザ配達のバイクボーイのような見える人件費だ。

・少数民族はなぜ派手か: 技術的には一番遅れているはずの少数民族の衣裳等が辺境の住民であるほど派手なのは、どうしてそんな技術があるのか不思議になるが、必要は発明の母と言うことらしい。

・写真時代の絵画の在り方: バカチョンカメラが普及した現在では絵画の記録的性格はほとんど不要になったが、絵画自体が不要になったわけではなく、ファンタジーや心に特化して描けるようになったと言うことだ。

・上智な人たち: 上智大学はここ半世紀で結構偏差値が上がった大学だが、教育方針や生徒募集においてキリスト教を棄てて前面に打ち出していなかったことが、勝因の1つであろう。

・眞子さま婚約のほほえましい話ほか: 人の頭は妄想と誤解で出来ている。特に暇なおばさんやJK達の頭の中はかなり不思議な構造をしていて、ほとんどピーマンだ。

・ロシアの南下政策と満州: 最近まで超大国だったロシアだがその歴史は意外と浅くて、日本なら戦国時代以降だ。それにしてもかつて漢や唐を悩ませた北方民族は、ロシア進出の際にどこに行ってしまったのだろう。

・クールジャパンの使命: 日本初のサブカルのためにも、明治初期辺りに書かれた中途半端に古い作品群は、もっと古代の書写しかなかった時代並みに整理されて然るべきではないか。

・バックパック旅行: 自由にバックパック旅行をする多数の外国人を見るたびに、終身雇用とか年金積立等の理由で海外に出る自由を束縛している日本は、いずれ内向きに崩壊するのではないかと危惧する。

瞑想録(その24)

・浮舟(源氏物語第51畳): 源氏物語のような長編古典は、ドッグイヤーの現代人には読む時間が取れそうもない。そういう場合には全体の要約を読むよりも適当な1畳のみを読む方が、雰囲気を理解できる気がする。

23、蓋然推理術(その2)

蓋然推論に係るこれまでの記事を、その2つの大きな山である①素朴な疑問と②意外な気づきの観点から、引き続き1記事数行にまとめなおす。目標は蓋然推論術におけるメタ法則の導出である。

・恐怖の判官贔屓: ①民主の枝野のような危ない奴がどうして躍進したのか、②日本人には判官贔屓と言う国民情緒法があってその本質は対象者の思想信条に関係ないので時には国政すら左右する。

・4年目のアベノミクス: ①モノづくりが総崩れで稼げていないのになぜまだアベノミクスなの、②その通りだがそれでも現実にアベノミクス以上の処方箋がない程に日本経済は老人化している。

・法人の一体性: ①東芝のおかげで日本でも洗濯機やテレビが持てたと言う議論は擁護理由になっていないのではないかと、②社員は全員入れ替わっていてもはや同じ会社でない。

・文明批判の批判: ①ブログを用いての文明批判はずるいのか、②古代文明はともかく現代消費文明はそもそも運命的に「使ってなんぼ」の物である。

・東芝崩壊の真犯人: 元祖真犯人の西室泰三さんは異例の大抜擢で運の強い人ではあった、②最強の幸運は詰問される寸前にさっさと死んでしまったことだ。

・真実のありか: ①偉大な発見者はどうしてしばしば不遇の死に方をするのか、②不遇の死が嫌ならせいぜい大学や会社で頑張る凡庸な人生を器通りにやりなさい。

・意味理解の境目: ①理解の境目辺りは茫洋としていてどうも切れが良くない、②それがアナログの自然な形態でありアナログに関する最強の定理です。

瞑想録(その24)

・文明と未開の分岐点:①現代文明はなぜ単色なのだろう、②現代文明がすべてコペルニクス辺りの「非常識が真実でありかつ儲けになる」という新常識に始まっているからです。

・歴史となり切り:①歴史の記憶に語呂合わせとかが必要なのはなぜだろう、②人の脳は物語と起承転結で事物の本質を認識するようにできているからだ。

・もったいないと言うこと:①技術革新による非互換な新メディアの登場により古い努力の成果が自動廃棄されるのはもったいない、②もったいないですが他方で努力の不要な情報整理にもなる。

・絵画と夢が教える本当:①ピカソとかキュービズムの人たちって頭が曲がっていないか、②物理空間でなく心象空間を描くとピカソのようになるのであり全く曲がっていません。

・論理より自然性:①論理で言い負ける自分って頭が悪いのかな、②論理は反論しにくいだけで実態の一面しか表現できないものであり人の通常はもっと自然思考です。

・払いたくない人件費:①ピザバイクの兄ちゃんとか働いている分だけ偉いのかな、②人から金をとるのには涙が出るような犠牲が必要でありバイクに乗ったくらいで偉いとは思えません。

・少数民族はなぜ派手か:①辺境の少数民族ほど衣裳等が派手ですがどうしてそんなに高度な技術があるのですか、②少数民族でも素心で自然に親しんでいればその程度の技術は持てるのであり単に科学技術に至る連続的発展がないだけです。

・写真時代の絵画の在り方:①バカチョンカメラで誰でも写真を写せる時代に絵画の存在価値はあるのですか、②真実記録ではなく心象とか嘘を描けるのは絵画だけです。

・上智な人たち:①上智大学は昔より格が上がったように見えますがなぜでしょう、②少なくともキリスト教に凝り固まっていなかったのは大きな勝因でしょう。

・眞子さまの婚約のほほえましい話ほか:①世の中のおばさんやJKはどうしてレベルの低いうわさ話に走るのですか、②単にバカで品がないからで地上のエネルギーの壮大な垂れ流しです。

瞑想録(その24)

・ロシアの南下政策と満州：ロシアがわずか500年であそこまで広がった時に匈奴はどうして抵抗しなかったのですか、②移動したのか弱体化したのかなぜか空白地帯になっていました。

・クールジャパンの使命：①明治文学は膨大ですが今でも読む価値があるのですか、②ほとんどが歴史的価値しかないのもっと整理されるべきだと思います。

・バックパック旅行：①外人は日本に大勢長期旅行に来るのに日本人はまとまった休暇が取れません、②だから日本人は視野が狭く世界に通用しなくていずれしっぺ返しが来ます。

・浮舟(源氏物語第51畳)：①日本人の誇る名著ですが長すぎてとても読み切れません、②要約で流れを知るよりもどれか1畳をじっくり読んだ方がその品を理解できると思います。

思いついた順に並んでいるので広範囲になってしまい、なかなかまとまりが見えにくいのが残念です。ブッダが八正道や四諦の法則を見出したように、王道や本流が見えてくると良いのですが。

24、時給1200円(ランダム短編③)

「おはようございます～」、皆さん今朝もそう声を掛け合いながらオフィスに入っていく。先ずあてがわれたパソコンを立ち上げると、自動的に始業時刻がサーバーに記録される。あとは昼食時を挟んで、それぞれが所定の仕事をこなしていただけた。

このオフィスに勤める人々は、全員が日給制だ。時間当たりの単価で契約されている。ある人は時給1000円でありまたある人は1240円、更にまたある人は時給1500円と言う訳だ。1日の労働時間を掛け合わせて日給になるので、中には「本日は2時間だけ」と言う人も居る。

仕事中に私語は厳禁だが、多少の会話はある。本田さんはここに来る前は牛丼屋で働いていたそう。そして鈴木さんはスーパーのレジ打ち、更に大友さんは何とゴミ収集トラックに乗っていたそう。それぞれが持ち寄る世界は広い。

瞑想録(その24)

「そう言えば最近まで来ていた五十嵐さん、ここ数日見ないわね」「ああ、あの人ならばらく仕事を辞めて東南アジアの方にバックパック旅行行くとか言っていたわよ」。まあこんな感じでお互いの消息を交換し合う所は、いかにもありふれた普通の職場だ。

ちなみに同じ雑居ビルの隣室には病院が入っていて、看護婦が詰めている。その看護婦が定期的に受診に来る榛名婆さんに、「患者の榎本お爺さん最近待合で見ないけど、どうしたのかしら？」と尋ねる。すると榛名婆さんは、「変ねえ、どこかお悪いのかしら？」などと答える。ボケが始まっているらしい。

こう見ていくとことさらに話題にする必要すらない、どこにもあるような変哲のない職場に見える。ところが実は大きな違いがある。人々は皆時給のバイト労働者なのに、雇い辞めと言うことがないのだ。つまり来たければ、10年でも連続してくることができる。

派遣はおろかバイトでもこう安定しているとは、どこか豊かな産油国の話ではないかと思うだろう。それが実はそうではなくて、この日本なのだ。そしてこのエリアは、別のエリアもそうだが、特区とか特別の雇用モデル地区に指定されている訳でもない。

さて終業時刻が来た。みな日給のために一列に並ぶ。「本田さんはハイ6700円、鈴木さんはハイ8450円、大友さんは短時間だから4590円ね」。まあこういう日ごとの清算で、本田さん、鈴木さん、大友さん以下全員が、言われたとおりの金額を払って皆帰っていく・・・。

現在の日本とどこが違うのか、勤の良い人ならもう分かるだろう。お金の方向が逆なのだ。本田さんは6700円をもらうのではなく、支払っているのだ。一体誰に支払っているのか。その場を管理している、「監督さん」というあだ名のロボットにだ。

近未来の日本、日本だけでは世界中が、人工知能とロボット技術の格段の進歩により人の労働はおよそ不要になってしまった。人が働かなくても必要な富はこれらの人工知能とロボットが、プログラム通りに生産し届けてくれるのだ。

そしてその富の公平な分配の為に世の中は、財源不要のベーシックインカム制になった。通常の衣食住程度なら、誰も不足しないようになったのだ。つまり人が、労働と言う強制義務から解放されたのだ。そのおかげで皆さん誰もが嫌な仕事などもはやしないで、趣味に打ち込めるようになった。

瞑想録(その24)

ある人は絵画や書道、またある人は鉄道や軍事、またある人は蘭やチューリップの栽培。もっと知的なことがしたい人は自分でテーマを見つけて自主研究もできる。競馬やパチンコでも良い。成果はSNSで交換し、友達もここで出来る。全員が貴族の時代だ。地上にもパラダイスがやってきた・・・。

ところがここで問題が起きた。趣味がない、どうしても見つからない、あるいは全部やり尽くしたと言う人々が少なからず居て、彼らは膨大な時間の潰し方がなくて、気が狂いそうになってしまったのだ。そこで政府は苦肉の策として、ロボットよりはるかに非効率ではあるが仕事場を作ったのである。

だから暇を持て余している人は、適当な仕事場に登録して働かせてもらう。だがことさらにやらせてもらうのだから、その人々は自分のベーシックインカムを割いて、お金を払って仕事をさせてもらうのだ。絵画が趣味な人は絵の具代を払うだろう、それと同じ感覚だ。

仕事にも単価の違いがあって、ゴミ収集とか兵士とかは特に単価が高い。つまり1時間当たり他の仕事より多くの金を支払う必要がある。仕事内容がマニアックであるために一種の趣味とも言えて、むしろ自慢できる趣味としてやりたい人も多いからだ。

そう言う人たちはその分だけ、食事の質は我慢する。我慢してでもやりたいのが趣味であって、飯代を趣味につぎ込むのは今でもごく普通のことだろう。まあこの時既に壮年な人は、まさか自分の目の黒いうちにこういう時代が来るとは思ってもみなかっただろう。技術の進歩はいつも加速度的なのだ。

* * * * *

今回のランダム短編で行ったのは、「みんなが心から望んでいることが実際起こったらどうなるか(期待通りか)」と言う思考実験です。似たようなテーマに、「庶民のあなたがある日天皇になったらどうなるか(幸せか)」というのもあり得ます。

2018. 02. 15